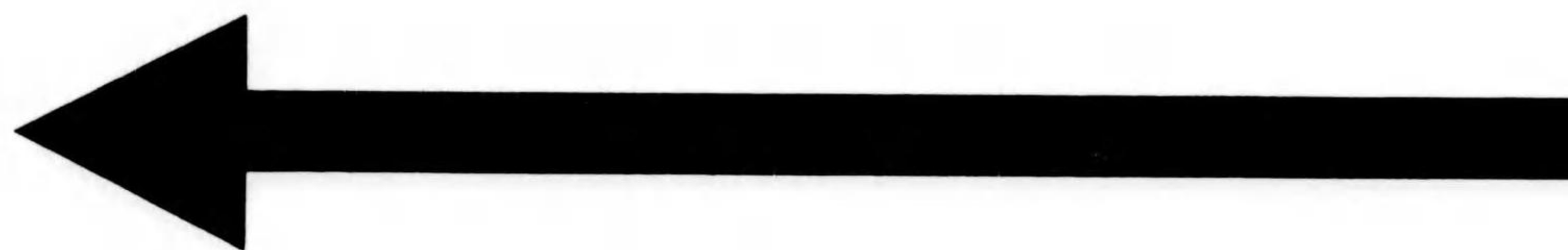


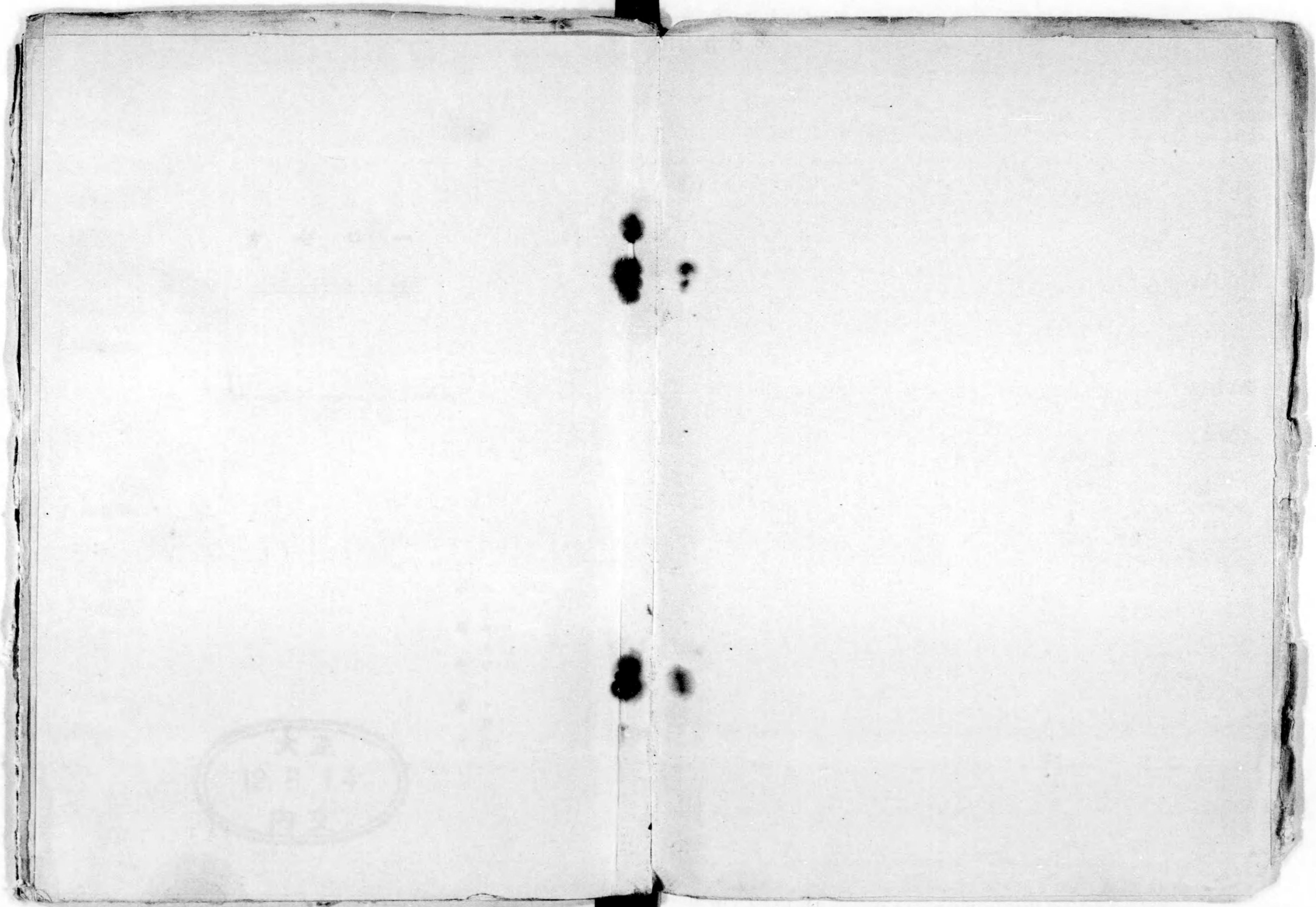
才也一口



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 50 1 2 3 4 5

始





1854

特100
625



セーキスビーヤ原作
小島春潮譯

大正
12. 8. 14
内交



オセロー「解題」

◎本篇は沙翁が三十七篇の戯曲中、四大悲劇の一として知らるゝもの、創作の年月は定かならざれど、一六四四年と推定せらる。

◎取材は伊太利の作家チンシオの作「ヘカトミン」の取れりと云ふ、されど、如何に單純なる材料が沙翁の富瞻なる想像力と、自由なる妙筆によりて活躍せるかは、天下の等しく認むる所なり。

◎殊に篇中の人物イヤゴの如きは、沙翁の如き巨匠の手を俟たずんば、見る能はざる人物、實に嫉妬と野心と、執拗の化身と云ふも過誤なきの徒なり。

◎オセローが一片の嫉妬より悲惨なる悲劇の主人公となりしは、マクベスが大

野心に驅られて、大逆の人なりしと、同巧異曲の如くして、而も、全く別種の悲劇なるは、沙翁として始めて企て得べき所。凡庸の作者の企及し得べき所にあらず。

○要するに本篇は、沙翁の代表的作物として、文學に趣味ある人の、一讀せざるべからざるものたり。これ、茲に「名著叢書」の一に收めたる所以なり。

譯者 守田有秋

オセロー

セーキスピア作

守田有秋纂譯

「I」のー オセロー將軍

今は昔、伊太利ヴェロナの市に、富裕な元老院議員、ブラバンシオと云ふ人があつた、此人の令嬢デスマーナと云は才色共に秀ひてた少女であつたのみか嫁入には莫大な持參金が附いて居ると云ふので、市の若い紳士達、我れも我れもと、デズデモーナを妻にと所望するけれど、此の少女は他人よりは異つた性

格の人で、眉目よりも心に重きを置きて男の品定めするだけの見識を備へて居たから、同じ市の誰彼れには心を寄せず、却つて平生父の懇意にして居たムーアの將軍オセローと云ふ色黒の男に思ひを寄せ、父の許をも得ず結婚して了つた。

さて、此のオセローと云ふは剛勇無双な武人として、ヴェニス政府に重く用ゐられて居たが、近頃自分の部下のマイケル、キヤシオと云ふ士官を副官に採用した爲め、キヤシオの同僚であるイヤゴと云ふ男のために悪く怨まれて居る。

イヤゴは何とかしてオセローとキヤシオを、不運な目に陥れて呉れやうと、其の機会を待つて居たが、曾てデズデモーナに結婚を申込んで逃げ付けられたロデリゴと云ふ男と懇意にして居る所から、此の男を焚き付けて、オセローの事をブラバンシオに悪様に告げさせ、それがためにオセローは、訴たへ

られてヴェニス公爵の前で取調べを受けることになる、

恰度此の時、ヴェニス政府へ、土耳其の艦隊がサイプラス島を襲撃に來たと云ふ報知がついた、政府ではオセローを征討將軍に任命して、此の外敵を撃滅する心算で、今しもオセローを召寄せやうとした所へ、オセローは、娘を盗んだと云ふ廉でブラバンシオに連れられて、ヴェニス公爵の御前に出る。

『 』の二 ヴェニスの會議室

ヴェニス公爵の會議室では、公爵を初め元老院議員が寄集まつて、土耳其艦隊がサイプラス島へ押寄せて來たと云ふ大問題に就いて、鳩首凝議して居ると、其處へブラバンシオとオセローが、イヤゴ、ロデリゴなどと共に入つて來

る。

公爵はオセローを一目見て、

公爵「お、勇敢なオセロー、公敵とも云ふべき土耳其人を征討するため、其處許を派遣しなければならぬ、……(ブラバンシオに)お、ブラバンシオ、其處許を見なんだ、よろこそ來られた、其處許の意見を聞き度いと思ふて居た所ぢや。」

ブラバ「閣下、御免下さりませい、實は手前、斯く夜半に起ましたは、役目故では御座りませぬ、又、御用向を承はつた故でも御座りませぬ、又國を思ふが故でも御座りませぬ、實は一身は關はる悲嘆が、堰を越えて溢きり、他の心配事を呑み盡したからで御座ります。」

公爵「ほう、それは、一體何うせられたと云ふ事ぢや」

ブラバ「手前の娘が！ 娘奴が！」

議官達「え！ 死亡なられたとでも云はれるのか」

それに對してブラバンシオは、我が娘のデズデモーナをオセロー將軍に盗み去られたと云ふ、それも、唯の方法で盗み去られたのではない、必ず魔法妖術に依て盗み去られたに相違ない、何故と云へば、あのオセロー如き黒人に、我が娘のデズデモーナが心を動すべき理由がないからと言ふ。

そこで公爵はオセローに對し、右に就いて言ひ開きが出来るならば仕て見よと言はれる。

オセロー「最も權威ある、元老の方々に申し上げます、拙者がこれなる老人の娘を取りましたことは事實で御座います、眞實結婚いたしました。拙者の罪の源は、是以外には御座りませぬ。——拙者は無作法もので、平和の場合に用ゐる柔かな言葉は下手で御座る、夫と申すのも、拙者の此の腕は、辛と七ヶ年成長いたしまして以來、今日まで、唯た九ヶ月使はずに居りましたき

りて、其他は陣營に許り、其尊い仕事を仕て居りました。拙者は、戦争に關した事の外には、此の世界中のことで、お話の出来るやうな事は御座りませぬ、それ故、拙者自身のことについて申開きをいたしたとて、利益にはなりませぬが、お許しを蒙りまして拙者が、情事に關する、始終をお話し申し上げませう、——如何やうな藥、如何やうな魔法、如何やうな呪文、妖術を以つて娘を手に入れたかとの嫌疑で御座りますか——あの仁のお娘御を何のやうにして手に入れたか、それを申し述べませう」

オセローの此の言葉に對してプラパンシオは何うしても魔法か何かの手段に依つて欺むいたのものに相違ない、さもなくば、あのやうな少女が、氣性にも、齡にも、國土にも、外間にも背いて、見るさへ怖ろしふ思ふて居た人に戀慕する筈はないと云ふ。

元老院の議官共は、尙重ねてオセローに向かひ、

「果して魔法、魔術の類で女を騙はしたのか、それとも懇ろに言ひ寄つたのか」と詰め寄る。オセローは、何卒サジタリ館へお使者を遣はされ、婦人をお呼び寄せの上、父の面前にお問ひ下さるやうにと云ふ。

其處で公爵は旗手のイヤゴに家來のものをつけてデズデモーナを呼び寄せにやる。

其間にオセローは、元老の前に次の様な申し開きをする。

オセロー「女の父は拙者を愛して呉れました。度々拙者を招いて、合戦、城攻、勝負のことなど、拙者が是まで年々経たりました來歴に就いて尋ねました、拙者はそれを残らず話しました、小兒の時の事より、話せよと申されました時の事まで——拙者は、最も不幸なる災難、海上又は戰場の恐ろしい格事、危機一髪の危きを逃れたこと、無法な敵に捕へられて奴隷に賣られたこと、それから身受けをされた後、諸所を流浪遍歴したこと、人の住はぬ洞穴、茫

漠たる沙漠、岷峨たる石山や岩や、天にも遠くやうな山やそれ等のことを語りましたのが、拙者の手段で御座ります、それから互に食ひ合ふカニバルの事、負人種のこと、首が肩の下にあると云ふ人種の事、これ等のことを、デズデモーナは眞面目に熱心に聞き度がありました。家事の用で時々呼ばれますけれど、すぐと用事を済ませ、歸つては、貧り食ふやうにして、拙者の話を聞きました、拙者は、その様子を見て、良い機会に、拙者の生涯の話を聞き度がるやうに仕向けてやりました、一部一部は聞きましたけれど、通しては話を聞なかつたからと申しますので、拙者はそれを承諾いたしました。そして幼ない時の、艱難辛苦をした事どもを話して聞せて、時折涙を添さしました、——此の様な艱難辛苦を致しました故に、女は拙者に同情を表して呉れました、同情を表せられたが故に、拙者は女を愛する様になりました、……拙者の用ゐた魔術はこれより外には御座りませぬ、——あゝデズデモ

ナがあれへ参りました、彼女より證言をお聞きとり下さりませい、公爵「成程、此の様な話では子の娘とても心を寄せるであらう、——これブラバンシオ、最早損なはれた以上は、繕らうより外はない、壞はれた武器でも空手よりは優ぢや」

其處へデズデモーナは、イヤゴー其他の人々に導かれて入つて來た。

ブラバ「何卒、女の申條をお聞きさされい、若し女より半分でも言ひ寄つたやうに自白いたしましたならば、其時こそオセローを罪しやうとした拙者の頭に破滅降れ！」(デズデモーナに向ひ)こり、女、其方は此の御歴々の中で誰れに従はねばならぬと思ふて居やる」

デズデ「阿父様、妾の従はねばなりませぬことに二つに分れて居ります、妾を生んで、育て、下さいました、養育の恩ある父上を敬まはねばなりませぬ妾は父上の娘で御座いますもの——なれども、父上此處に妾の良人が居りま

する、母上が、母上の阿交様よりも、下下に御盡しなされたやうに、妾も良人に盡さねばなりません。

此の言葉を聞いてアラバンシオは思はず長大息して公爵に言ふやう、

アラバ「公爵閣下、最早川事は預みました、何卒、國家の御用向をお進め下さい、——オセロ殿此の上は信實女を其許に遣はしませう、其處許は、最早娘を手に入れて居られる、若し左もなくば、信實女を遣はしはせぬものを——如、其方ゆゑに、俺は世に子供のないことを喜びますぢや——」

さて公爵はアラバンシオを種々に慰めた後でオセロに向ひ、

公爵「これオセロ、土耳其が軍を集めてサイプラス島に向ふた、彼處の要害を、其方は能う存じて居る筈ぢや、彼處には老練な總督が居るけれども、權力ある輿論は、其方を遣はすが更に安全ぢやと云ふて居る、就ては新婚の喜びより遠かつて、暫し騒がしい征討の事に従事して貰い度いものぢや」

オセロ「議官の方々に申上まする、身共は嚴重な習慣に慣されて居りますに依て戰場へ出て石や鋼鐵の枕をすることは、三度撰りの綿毛の寢床も同様に考へて居りまする、艱難には喜んで進みまする拙者なれば、土耳其征伐のことは、確に承知いたしました。それに就いて、妻には、相當の御取扱ひが願はしう存じまする」

公爵「其方に異議なくば、父の許に預けやう」

アラバ「それは、平に御歸り申します」

オセロ「拙者とても」

オセロ「妾とても、父の前にあつて、父に切ない思ひをさせながら、一緒に住んで居りますことは、好みませぬ、御仁慈の公爵様、何卒妾の申上げますことをお聞き下さいまして、不束な願を御許し下さいませうやうに」

公爵「オセロモトナ、其方の願と云ふのは何事ぢや」

デズデ「妾が、父をも家とも棄て、オセローどのに従ふたのは、一緒に居度い

がため御座りまする、それは世間もよろく存じて居りまする、妾はオセロ

一殿の心をば相貌と詠めて、其の徳と勇氣とに、魂をも運命をも捧げて居る

ので御座いますから、何うぞ夫と一緒に居かして下さりませ、

それに就て、オセローも同じ様な事を頼んだ。それは、妻が傍に居るからと言

つてそれがために役目を忽かにする様なことは、假りにも御座いませんから、

何卒同伴を御許し下さる様にと云ふのであつた。

公爵「留めやうとも、伴れて行かうとも、其方の心任せにせられい、なれど、

公用は火急なれば、急いで勤めて貰い度い」

弐議官「今宵の中にも出發して貰い度い、

オセロー「承知いたしました」

公爵「明朝九時に又遇ふと致さう、オセロー、誰れか部下のものを残して置か

島を指して出發することになる。

れい、予が教書は後より送るであらう」

オセローは、部下の旗係イヤゴに妻デズデモーナを托し、直ぐとサイプラス

島を指して出發することになる。

初めよりデズデモーナに熱心なロ德里ゴと云ふ若者は、デズデモーナがオセ

ローと一緒に居たのみか、今度サイプラス島へも一緒に居ると云ふので、失

望落膽の極度に達して居る、旗係のイヤゴは、ロ德里ゴを欺いて金にする

心算であるから、自分と一緒にサイプラス島へついて来い、必ず悪くは計らは

ぬと云ふ、愚かなロ德里ゴは、金の準備をしてイヤゴの伴をすることにな

る。

前言ふ如くイヤゴは、オセローが、自分の同僚キヤシオを重用して副官に採

用したことが癢に觸つてならぬ、其處でキヤシオの好男子である所に目をつけ

、キヤシオとデズデモーナが、怪しい關係でもある様に細工をした上でキヤシオを陥し入れて、同時に、オセローに對する恨みを晴さうと決心する。唯だ一人、哀れなのはデズデモーナである、斯る荒漢が、斯る悪る企みをして居ることとは露知らず、良人の後を慕ひ、サイブラス島をさして出發することになる。

『二』の一 サイブラス島

此處はサイブラス島の港口である。

サイブラス島の假總督モンタノーは、一二の部下を従へて、怒濤の逆捲いて居る海岸に立つて、頻りに土耳其艦隊のことを噂さ仕合つて居る。

乙紳士「土耳其の艦隊は散々になつたて御座いませう、此の泡立つて居る岸に

立つて御覽さなれませ、逆捲く浪は雲を打つかと思はれます。風に煽られた浪は、高い、恐ろしい蠶尾を振つて、小熊星に水をかけて居ります。定坐として居る北斗星の守を消さうとして居ります、此の様な荒はついぞ見たことも御座りませぬ。

モンタ「若しも土耳其の艦隊が、何處かの港へ避難しなかつたならば、屹度沈没したのであらう、——迎も堪へられやう筈がない」
其處へ丙紳士が出て来て、土耳其の艦隊が被船したと、ヴェニスから船の入港つたことを知らせる。

丙紳士「入港つて参りました船はウエロニサ號と云ふ船で、ムーア將軍の副官、マイケル、キヤシオと云ふ方が上陸せられました、將軍御自身は未だ海上に居られますが、將軍はサイブラス島の全權を委任された由に御座ります」
モンタ「それは結構ぢや、あの方は立派な總督ぢや」

尚ほ丙紳士の言ふ所を聞くとキヤシオは土耳其古船の敗北しことは喜んで居るが、自分が暴風雨のために、本船と離れ離れになつて了つたことを甚く心配の體であると云ふ。

すると恰度此處へキヤシオが來合はして假總督に挨拶を述べ、尙ほオセロ將軍の事を、かれこれと取沙汰して居る所へ、遙に海上より、禮砲が轟ろいてかの旗手イヤゴとデズデモーナと、イヤゴの妻エミリヤなどを乗せた船が入港する。

一同はオセロ將軍の船が未だ入港しないので心配して居ると續いて禮砲が鳴つてオセロ將軍の船が、港に安着する。

やがてオセロが従者等を伴れて來ると、デズデモーナは駆け寄つて迎へる。

オセロ「我が女丈夫か！」

デズデ「お、オセロ様！」

一ロセオ

二人は互に相抱く。

オセロ「予よりも先に此處へ到着して居やうとは、思ひもかけぬ喜びぢや、あゝ喜ばしい。暴風雨の後に此のやうな風が來ることならば、風も吹け！、死人の夢を驚かして覺すまで吹い！又、浪に揉るゝ船も、オリンポスの峰までゆり上げられて、奈落の底へ沈め！若しも、今死ぬならば、此の上もない幸福ぢや、何故と云へば、これに優る喜びを、先も知れぬ運命が、又と持て來やうとは思はれぬゆゑ——」

デズデ「あれ、まア、その様なことがあつてなりませうぞ、……なれど、神様が、二人の愛と喜びを月日と共に増さして下さりますやうに」

オセロ「神々様よ、その様にあらしめ給へ、——此の嬉しき、言葉には盡されぬこれ、此の胸につかへて——、餘りに喜びが多ほ過ぎます」

二人は又もや相抱いて接吻する。

それをして居たイヤゴは思々しげに、楯を向いて、
イヤゴ「は、は、は、大分、調子がよく合ふぞ！なれど、今に其の音締を、ゆるめてやらうぞ！」

オセロは尙ほも妻に向ひ、

オセロ「さ、城内に行かう——。いかに、方々、戦争は濟んだのぢや、土耳其人は濡れ死んで了ふた、……これデズデモーナ、其方も此の島でよく仕て貰はれやうぞ、予も、可愛がられた、——お、迂闊饒り過ぎた、餘りの嬉しさに老耄たのぢや……、これイヤゴ！太儀ながら波止場へ行つて、予の荷物を揚げさせ、船長を岩へ案内して呉れ——さ、デズデモーナ、あらためてサイプラス島で遊ばう」

オセロ「將軍とデズデモーナは相携へて城内に入る。後でイヤゴはロデリゴを對手に、又もや密々と悪計を廻らす、悪計と云ふのは、次のやうな事である。

ある。

イヤゴは今夜祝ひのあるのを幸ひロデリゴをして、夜中に大騒ぎをさせ、監督のキャシオを立腹させやう計畫である、元來キャシオは短氣な男であるから、屹度ロデリゴを打つに相違ない、すれば、イヤゴはそれを種に、サイプラスの人民を煽動させて、騒動を起させ、その咎によりキャシオを免職させやうと云ふのである。
二人の悪漢は、互に協議を凝して、夜になるのを待つて居る。

『M』の二 城内大廣間

其の夜、オセロは傳令の役人をして次のやうな布告を街中へ傳へさせた。
それは、土耳其艦隊、滅亡の注進が參つたから、名々捷軍の祝をして、舞踏な

り、花火なり、遊戯、宴樂、勝手たるべし。殊に今宵は、右吉報の來た外に、將軍の新婚の披露があつて食堂は何處も開放し、五時より十一時までには、飲食共に各人の心任せである云ふのである。

其夜オセロは、キヤシオに向ひ、今宵の取締りは、萬事其許に依頼するから落度のない様に頼む、又祝宴も、餘りに浮れて不體裁にならぬ間に止めさせるやうにと吳々も注意して、デズデモーナを作ない、我が部屋にと入る。然るに、イヤゴは、キヤシオが餘り酒の飲めぬ事を承知して居るから、大に盛り潰した上、彼のロデリゴに亂暴させて、島の住民に騒動を起さしてやうと考へ、キヤシオに向ひ、イヤゴ「……副官どの、此處には一壘の酒が御座る、それに戸外にはオセロ」將軍のために祝盃を擧げやうとして、サイプラスの若者どもが集つて居り

ますこと故貴殿の代りは拙者めがつとめませうから、呼び入れて一杯飲してやつて下され」と云ふ。キヤシオはそれを拒んだが、島の者に祝盃をあげさせるのは將軍の希望であると言つて、無理にキヤシオを勧めて、イヤゴは多數の人々を食堂に入さす。固より其中には、豫じめ隠し合せて置いたロデリゴも入つて居るのである。イヤゴは、自ら先に立つて暢氣に歌など歌ひ、散々キヤシオに酒を飲して置いて一方には彼のロデリゴをして無禮な言動をさせる、すると短氣なキヤシオは抜劍してロデリゴを追ひかけいきなり打つ。其處へ島の前總督モンタノが出て来て、キヤシオとロデリゴの間に割て入り仲裁を試みるけれども、キヤシオは中々承知せぬ、終にはモンタノと立廻りになつて、傷を負はずと云ふ騒動を仕出かした。此の間に、ロデリゴは街に走り出て、椿事の時に鳴らすべき非常鐘を打ち鳴

らさず。それを聞いた島民どもは、何事が起つたのかと思つて、馳せ集り、忽ちの間に島の中は大騒ぎになる。

新婚間もない夫人と共に、臥床に入つて居たオセローは、非常鐘を聞いて、從者共と共に、堂へ出て来て見ると、モンタノーが負傷して居ると云ふ始末、一體、何が因で、何が起つたのやら、オセローには少しも判らぬ。其處でイヤゴ

に此の場の様子を聞くと、イヤゴは言葉巧みに、イヤゴ「實は將軍、斯様で御座りまする、モンタノー殿と手前と話をして居りまする所へ、助けて呉れと申して走て参つたものが御座りまする、すると、其處へキヤシオどのが抜劍して、今にも其奴を斬り殺して了ひ相に、色相かへて追馳けてお出でなされました。そこで、此のモンタノー殿が二人の仲へ割て入つて、キヤシオ殿をお止めになりまする、手前は又叫く奴めを追馳けて参りました、……萬一市中を叫き立て、騷動になつては一大事と存じ

たからで御座りまする、……果して騷動になりましたが……所が彼奴め足が早うて、逆も追付けませぬ。引返して見ますると、打ち合ふ劍の音、キヤシオ殿の怒鳴聲、——恠う云ふことは、是迄にいつぞ無つた事で御座りまするが、——さて歸つて見ますると、御兩所は、一團になつて、打つやら突くやらの大騒ぎ、閣下が御引分けなされた時は、恰度二度目の騷ぎをやり掛けた時で御座りまする。手前の存じて居ることは唯だこれツきリ——、いや何と申しても、人間は人間で御座りまする、何の様な賢人でも、時には自分忘れれることも御座りまする。キヤシオ殿は、モンタノー殿に對して、少々不埒を働かれたなれど、腹の立つ場合には、つい自分のためを思ふて呉れる人をも打つ場が間々御座りまする、したが、キヤシオ殿は、逃げて行つた奴より、一方ならぬ侮辱を受けたものに相違御座りませぬ」

オセロ「いや、イヤゴ、其方の忠實な心底から、其方は今日の事を小きう言つて、キヤシオを庇はうとして居るに相違ない、——キヤシオ、予は其方を愛しては居るが、最早予の部下として使ふことは出来ぬ……」

其時、夫人のデズデモーナは侍女と一緒に入つて来る。
オセロ「あれ見よ、奥をさへ起して了ふた……キヤシオ、予は其方を、外々

の者の、見せしめにせねばならぬ」
デズデモーナは良人に向ひ、
デズデア「何事て御座います」

オセロ「いや何に、もう酒んだ事ぢや、さ、寝まれたがよからう、……モンタノ、其許の傷は、拙者自ら御介抱いたすて御座らう、こりや、御案内申上げよ！」

從者共はモンタノを介抱しつゝ入る。

オセロ「これ、イヤゴ市中を警戒して、此の椿事のために騒いで居る奴等を取鎮めて呉れい。……デズデモーナ、争闘のために、芳ばしい睡から覺されるのは武士の常ぢや……」

オセロ「夫妻と從者共は何れも去て了ふ、後には、懺悔の念に充されたキヤシオと、心地よげに勝利の笑を漏らして居るイヤゴの、唯だ兩個が残つたのである。

イヤゴは打ち惜れて居るキヤシオに向ひ、今宵の事は、唯だ一朝の、酒の上の失策故、將軍の奥方に御頼みなされた上、復職の運動をなされては如何で御座ると、言葉巧みに説き立てる、キヤシオは、それをイヤゴが、眞心から忠告して呉れることと思つて、自分でも、その様に決心して我が部屋へと歸つて行く。

憐れうして置いてイヤゴ―はデズデモ―ナとキヤシオを共に陥れ、終にはオセロ
 一をして悲劇の主人公たらしめやうと云ふのである。
 元來イヤゴ―の妻、エミリヤと云ふはデズデモ―ナの侍女であるから、イヤゴ
 一はエミリヤに吩咐けて、キヤシオをデズデモ―ナに取り持たせ、恰度キヤシ
 オが、夫人に頼み込んで居る所へ、將軍を連れ歸り、其の場の有様を見させた
 上、キヤシオと夫人が姦通して居ると言ひ做さう計略である。其の企みのある
 こととは毫知らずして、イヤゴ―を信頼して居るキヤシオこそあはれの極みで
 ある。

【III】の 一

城の前、

副官の行を判れて、失意の底に落されたキヤシオは、今朝、早く城の前に来て
 夫人附きの侍女が居るのを待ちうけて、取次を頼む心算で居ると、其處へイヤ
 ゴ―がやつて来る。

キヤシ「お、よい所へイヤゴ―殿」

イヤゴ―「や、貴殿はお寝みにならなかつたと見えるな」

キヤシ「いかにも――、實は貴殿と別れる前にもう夜が明けて了ふたのぢや、

實は唯今、不躰けながら貴殿の御内儀を呼びにあげた所ぢや、奥方デズデモ

一ナ様に橋渡しをお頼み申さうと思ふて――」

イヤゴ―「直ぐと彼女を寄越申さう、そして身共は又ムーア將軍を引出す工夫を

仕やう、自由に用談の出来るやうに。」

イヤゴ―は爾う言つて、去つて了ふ。

キヤシオ「あゝ忝けない、フロ―レンス人の中にも、あれ程親切で正直な男は

あるまい」

其處へイヤゴの妻エミリアが出て来る。

エミリア「お早う御座ります、副官様、——御不興をお受けなされて、ほんにお氣の毒でなりませぬ、けれども今によう成りませう、將軍様も奥方様も、其の事を話してお在てなされます、殊に奥様は、懸命にお取做をして居られます、けれども、ムーア殿の被仰るのには、貴下の傷をお負はせなされた方が此のサイプラス島でも名のある方故、何うも貴下を免職させねば濟まぬとの事なれども、貴下を少しも憎いと思ふては御座りませぬから、良い機さへあれば、誰に頼まれずとも、貴下をお呼戻しなさるとの事で御座ります」
キヤシ「けれども、御願ひぢや、不都合さへなくば、そして出来ることなら、奥方と差向ひて話すことの出来るやうに御取做下されい」
エミリア「さア、お入りなされませ、自由にお話しの出来る所へ御案内申しませ

う」
キヤシ「千万忝なう御座る」

【III】の二

城内の庭園

今しも、奥方のデズデモーナと、侍女のエミリヤ、それに副官のキヤシオは互に今度の事件に就て話し合つて居る。

デズデ「請合ひましたキヤシオ殿、貴下のために妾の出来る限りを盡しませう」
エミリア「何うぞ奥様、耐うなされて下さりませい、ほんに妾の配偶も、自分の事のように案じて居りまする」

デズデ「ほんに、イヤゴ殿は良い人ぢや、——キヤシオどの、屹度貴下と夫

の間を元通りに仕て置ませう」

キシオ「有難う御座ります、此のキヤシオの身は何の様になりませうとも、貴下の御親切は忘れませぬ」

デズデ「それを聞いて嬉しう思ひます、貴下は夫オセローに忠實な方でもあり、長い間の知合でも御座ります、屹し請合ひませう、——若し一時疎遠にせねばならぬにせよ、それは、唯だ世間態をつくらふ許りで御座います」

キヤシ「では御座りませうが、然し奥様、その世間態と、ふ奴が長く續きますれば、それが水餌食を食て居ても肥り、周圍の狀態から、それが次第に生ひ立つて、終には手前の居りませぬ間に代役が出来て、將軍は手前の愛をも勤勞をもお忘れなされやうも知れませぬ」

デズデ「其の御懸念には及びませぬ、このエミリヤを前に置いて、貴下の復職を請合ひます、妾が請合ふたからには大丈夫、何處までも盡します、

夫を息ませず、寢床をも學校のやうに食卓をも懺悔臺のやうに、事々にキヤシオ殿の事を交て頼みませう程に、御安心なされませ」

エミリ「奥様、殿様がお歸りになりました」

キヤシ「奥様、手前は暇をいたします」

デズデ「まアお待ちなされ、妾の言ふのを聴いてお在なされ」

キヤシ「いえ、唯今は不可ませぬ、氣が落ち着きませぬ故、お願ひを申上げ兼ねます」

キヤシオは勿々に其處を辭して出て行く、入り代つてオセローとイヤゴーが入つて来る。

イヤゴ「や！これは怪しからぬ！」

オセロ「何ぢやと？」

イヤゴ「いや、何でも御座りませぬ、いや——何も手前は存じませぬ」

オセロ「妻と別れて出て参つたはキヤシオではないか」

イヤゴ「え、何、キヤシオで御座りますと、閣下、キヤシオならば、閣下がお出でなされたからと言つて、何も悪い事でも仕たやうに、密々と逃げて行く事はないでは御座りませぬか」

オセロ「いや、あの男に相違ない」

其間にデズデモーナは夫を出迎へる。

デズデ「貴下、何うなされました。今愁訴人と話して居た所で御座ります、貴下に御不興を受けた人と——」

オセロ「一體それは誰れの事ぢや」

デズデ「はて、副官のキヤシオ殿で御座ります、——若し貴下、あの人を敷して御進げなされませ、あの方は眞實貴下を思ふて居る人で御座ります、あの方の不埒は過失からで、決して悪計からでは御座りませぬ、——何うぞ呼

び戻してお進なされませ」

オセロ「今此處から出て参つたのか」

デズデ「はい、大層耻ぢて、謙遜つて——。歸られました後までも貰ひ泣きを仕度い程、後悔して居られます、何うぞ呼び戻してお進なされませ」

オセロ「今は相成らぬ、いづれその内に——」

デズデ「でも、それは直きて御座りまするか」

オセロ「其方のために、威べく早う」

デズデ「今夜夕食頃までに？」

オセロ「いや、今夜は相ならぬ」

デズデ「では、明日の朝？」

オセロ「明日は、館で晝食は取らぬ、嘗て、將校たちと會ふ筈ぢや」

デズデ「では、明日の晩、でなければ火曜日の朝、——火曜日の晝か夜……」

又または水曜日すいようびの朝あさで御座ござりまするか——、何どうぞ時ときを定まめて下くださりませい。屹い度ど三日さんじつと經たたぬ間まに——、眞實しんじつあの方かたは後悔ごうかいして居をられます。戰いくさの時ときには何どの様ような方かたでも以後いごの見みせしめにせねばなりませぬなれど、通例つうれいならば、絶ちぎ交かをなさる程ほどの落度おちこでも御座ござりませぬ。——一體いつたい何時いつ呼よび返かへして下くださりまする、何どうぞ、それそれを被仰おつしやつて下くださりますやう。貴下あなた、ほんに貴下あなたが妾わがしに御頼おたのみなされることを、其その様ように拒こぼんだり、そのやうに躊躇たためらふたり仕した事ことが御座ござりまするか。あのマイケル・キャシオ殿どのは、貴下あなたと一緒にいっしょに結婚けつこんを申まを込こみに來また時に、妾わがしが貴下あなたの事ことを度々たびたび悪あしざまに言いへば貴下あなたのために肩かたを持つた方かたでは御座ござりませぬか、其その人ひとを取とり做なすのに、これ程ほど骨ほねが折をれやうとは——

オセロ「いや、もう何事なにごとも言いふて呉くりやるな、何時いつでもよい時ときに呼よび返かへさう、其方そのかたの言いふ事は、何事なにごとも拒いはせまい」

デズデ「これは、恩惠おんけいと云いふ程ほどの事ことでは御座ござりませぬ、手袋てぶくろをはめて下くだされと

か、滋養じやうになるものを食たべとか、温ぬるかうなされとか、……：貴下あなたのおためを思おもふて居おると同じおなじことことで御座ござります、いゝえ、若もし、貴下あなたが妾わがしの心こころを試ためすおつもりなら、それこそ許ゆるすのが恐おそろしい程ほど、きつい、無理むりなことを御願おねがひ申まをしませうぞ」

オセロ「いや、何どのやうな事ことでも拒いはせぬ、それゆえ、頼たのむから暫しばらくあち

らへ行いつて居おて呉くりやれ」

エミリヤとデズデモーナは二人ふたりで次つぎの間まへ行いく、後あとでオセロは獨語ひとりごとのやうに

オセロ「可愛い奴やつぢや！其方そのかたを愛あいせぬやうな時ときが來またら、此この世よは混沌こんとんの昔むかしに歸かへらう」

イヤゴ「御前ごぜん……」

オセロ「何事なにごとぢや」

イヤゴ「貴下あなたが、リへ御縁談ごえんだんを御申込おまをし込んだ時とき、キャシオは貴下あなたの方かたの仲な

を承知して居りましたか

オセロ「爾うぢや、初めから終まで存じて居たのぢや。——それを何うして御尋ねやる？」

イヤゴ「何に、少しく思ふたことが御座いましたから、いやなに、別に深い仔細は御座いません」

オセロ「何う思ふたのぢや？」

イヤゴ「あの男が奥様を存じて居らうとは夢にも思ひ付ませんこととて——」

オセロ「爾うぢや、知て居たとも、——時々仲介人をして呉れたのぢや」

イヤゴ「本統の事で御座りますか」

オセロ「本統！うん、本統の事ぢや、それが何うしたのぢや、——あれ位忠實な男は、又とないではないか」

イヤゴ「さア、その忠實と云ふ事が——」

オセロ「忠實ぢやとも——」

イヤゴ「手前の存じて居る限りでは——」

オセロ「其方は一體何う思ふのぢや」

イヤゴ「何う思ふと被仰りまするか」

オセロ「何ぢや、何う思ふと被仰りまするか！……」

オセロ「は心に思つた、此奴め、口眞似を仕をる、これは、何か打明ける事の出来な秘密なことがあるに相違ない——と」

オセロ「こりや、先程、キヤシオが妻の所を出て行つた時に、

「怪しからぬ」と言つたのを聞いたが、自體何が怪しからぬのぢや、又縁談にあの男が相談相手ぢやつたと話したら、其方は「え、本統に！」と言つて、額に皺を寄せた

ではないか、何か恐ろしいことを考へて居るに相違ない、予のためを思ふならば、存じて居ることを包まず話して呉りやれ」

イヤゴ「閣下、手前が閣下を思ふて居ることは、御存じて御座います。」
 オセロ「爾う思ふて居る、忠實で親切な男ぢやと知つて居ればこそ、其の方が
 その様に躊躇ふて居るのが恐ろしうてならぬのぢや、これが悪黨ならば、此
 のやうなことは人を欺す術策ぢやと思ふが、正直な者がそれを爲るのは、何
 か心の中に壓へ切れぬ、切實な煩悶があるに相違ない。」
 イヤゴ「手前は誓言いたします、マイケル・キヤシオは忠實な男ぢやと存じま
 するが——」

オセロ「予も爾う思ふ。」

イヤゴは、キヤシオが正直な男であると言ひながら、其の言葉の底には、何
 か秘密があり相に、チク／＼と針を持つたやうな言葉で、オセロの胸を刺
 す。オセロは益々突つ込んでイヤゴに真相のある所を話させやうとす
 る、——悪黨相に見えずして、其の實、比類のない悪黨と云ふのは、此のイ

イヤゴのやうな人物であらう。彼は、遠廻しに一步一步とキヤシオの謔言にか
 つたが、終には、露骨にデズデモーナとキヤシオを中傷仕て掛つた。

イヤゴ「……別に證據としては無いので御座りますが、キヤシオとの關係につ
 いて、奥様をよく御注意なされませ、……目を御おつけなされて、疑ふても
 なく油断するでもなく——。手前は閣下が、磊落な、寛大な、高尚な御氣質
 からして、人に馬鹿にせられてお在なされまことが残念で御座ります、
 手前は自分の國者の氣質をよよく存じて居りますが、此のヴェニスでは、
 夫には内密の悪事でも、天道様には隠しませぬ、奴等の良心は、それを仕な
 いのではなくして、それを知らせぬやうにすること御座ります。」

オセロ「屹度左様か？」

イヤゴ「閣下と結婚しやうためには、父御をも欺した婦人で御座ります、——
 閣下の顔を見て、恐がつて慄へてお在なされた時、實は大層執心で御座つた

のぶ

オセロ「威程、な。」

イヤゴ「さて、そこで御座りまする、あの様にお齡が若くつて在して、巧く取
繕らうて、魔術の故かとお思ひなさる程、父御の眼をくらまされた御婦人ぢ
やもの——、いや、これは失禮を申上げました、全く閣下を思ひます餘りに」

オセロ「いや忝けない——」

イヤゴ「お氣分に障つたやうで御座りますな」

オセロ「いや 些しも——」

イヤゴ「お氣分に障つたやうで御座りますな、なれども、おためを思ふて申上
げたのぢやと思ひを願ひます、……けれども、何うも御氣分に障つた様
にお見受け申します。何うぞ手前の申上げたことは、唯だ疑ひに過ぎぬもの
と思召して、それ以上には御考へ下さらぬやうに願ひまする」

オセロ「いや、爾うは思はれぬ」

イヤゴ「イヤ、閣下、若しその様な御推量をなされますと、手前の言葉が思ひ
も寄らぬ悪い結果を招きませう、キャシオは手前の親友で御座りますから
——、閣下、どうもお氣に障つたやうで御座りますな」

オセロ「いや 何んともない、——だが予は、デズデモーナが不貞ぢやとは信
じられぬ」

イヤゴ「いや奥方にも未長うその通りに、閣下にも亦、未長うその通りに！」
けれどもデズデモーナが、自分のやうなムーア人と結婚したことはオセロの
胸にも多少は疑念の種である。

オセロ「然し、自然の人情に負いて——」

イヤゴ「それ、その事で御座ります、無様に申せば、自分の生れた國の、性
質なり、階級なりに釣合つた……、爾う云ふのが自然であるのに、爾うで

ないと云ふのは、不自然でもあり、不釣合でもあるのに——いや、御免下さいませい、手前は明晰奥方を指して申した譯では御座りませぬが——、然し奥方が、閣下と國の者とを較べて、後悔なさることがないでも御座りますまい」

オセロ「いや、……さらばちや、此の後とても氣が付いたら、知せて呉りやれ、其方の妻女にも氣を付けさせて呉りやれ、——さらばちや、イヤゴ」

イヤゴ「では失禮いたしまする」

イヤゴ「は物蔭で様子を見て居ると、オセロは煩悶の思ひ入れて、思はず獨語を言つて居る。」

オセロ「何故子は結婚したぢやらう、あの忠實な奴め、今言ふた以上に、未だ未だ見たり聞いたりしたことがあるに相違ない」

イヤゴ「閣下、此の上御穿鑿下さらんやうに願ひまする、成やうにしてお置きなされませ、キヤシオは至極適任で御座りますから、後職をお許しなさるが當然とは存じまするが、尙暫く遠けてお置きなされましたならば、復職に何のやうな手筈を求めるか、其の本心が知れませう。——若し奥様が、懸命に復職をお請求なさるやうならば、様子が大分知れませう、それまでは、手前の中上げたことは、唯だ取越苦勞ぢやと思ひ下されませい……」

【 III 】 の 三

城の一室

イヤゴの言葉を聞いたオセロの胸は、忌々しさに煮え立つ計りであるが、

さてデズデモーナの顔を見ると、何うも、それが不義するやうにも思はれぬ。

デズデモーナは夫の心を知る由もないから、常の通りに話しかける。

デズデ「貴下、何うなされました、食事の準備も出来て居りますし、お招待になつた島の人達も来て居られまする」

オセロ「それは相澤まんことぢやつた」

デズデ「何故、その様に消氣てお話しなさいませ、御氣分でもお悪いのでござ

いますか」

オセロ「此の額が痛いのだや」

デズデ「それは乾度、夜起きてお在なされたからで御座ります、ぢきによくな

りませう、妾が縛つて差あげませう、ぢきに癒りませう」

デズデモーナは手巾を出して額を縛らうとする、

オセロ「その手巾は小さすぎる、ほつて置いて呉りやれ、さ、一緒に奥へ行か

ら」

オセロが妻の手を押し除ける拍子に、手巾はデズデモーナの手より落ちる、

兩人はそれに氣付ずして、一緒に奥の方へと行く、あとに侍女のエミリヤがそ

の手巾を拾い取る。

エミリ「此の手巾が手に入つて、よい都合ぢや、これは殿様が奥様にお贈りな

された最初の贈物ぢや。あの我儘な我夫が、それを盗つて呉れと、百たび

も言はしやつた、なれども、それは殿様が、決して手離してはならぬと被仰

つた品で、奥様が御大切に遊ばして、言を言ふて見たり、キツスを仕て見た

りなすつた。妾は此の型を寫してイヤゴ殿に進げやう」

エミリヤが爾う言つて居る所へ、突然イヤゴが入て来て、いきなり其の手巾

を取奪つて了ふ。

それが無くなつては、奥様が氣狂のやうにお成りなさうから、返して下され

いとエミリヤアは申請たけれども、イヤゴ―はそれに頓着せず、無理に奥の方へとエミリヤアをやつて了ふ。でイヤゴ―は心にうなづき、

イヤゴ―此の手中をキヤシオの宿に落して置いて拾はさう、空気のやうな軽いものも、嫉妬の深いものには、聖書の本文ほどに悪い證據にならう、うむ、

これが何かになるであらう、ムーアの奴め俺の毒が利いて、もう變りかけて居る、初の間は、苦いと思ふまいが、それが、血の中に働くとなれば、確

横の鑛山のやうに燃え立たう、それ、彼處へ来た、もう恚うなれば、醫藥でも、曼陀羅華でも、世界中のどの様な睡り藥でも、もう昨日のやうにお前を

冊らすことは出来まい」
其處へオセローは、奥から出て来る。

オセローは、イヤゴ―を捉まへて、デズデモーナには露疑はしい事はない、若し萬一にも彼女を譴誣して、予を若めるならば、承知相成らぬと言つて、イヤ

ゴ―を脅しつける、すると飽迄も口々しいイヤゴ―は、如何にも残念だと云ふ調子で、

イヤゴ―「あゝ、貴下は丈夫で御座りまするか、魂を持つてお在なされまするか、――あゝ手前はもう辭職いたしまする、――馬鹿者ぢや、正直が却つ

て身の仇となるとは、でも不思議な世の中ぢや、御用心なされ、世間の人々正直にするのは、身の破滅ぢや――。有難う御座いました、お蔭で物を覺え

ました、もう今後は友達に親切は盡しますまい、親切は唯だ恨を買ふ許りで御座いますから――」

恚う言つて、イヤゴ―は、再びオセローをして妻の貞實を疑はしめる。オセロー「爾う聞くからには、妻が貞實であるやうにも思はれ、又ないやうにも

思はれる、何か證據が見度いわい」
イヤゴ―「御覽が出来ませう。なれども。何のやうにして、何う云ふ風な證據を

「？」

イヤゴーは、キヤシオが寢言に奥方と不義をした事實を自白したと言ひたて、其上に、キヤシオが、奥方御所持の刺繍あるハンケチで、髭を拭いて居たなど、有ることないこと、列べ立て、オセローを焚きつける。流石のオセローも、それ程までに言はれては、信ぜざるを得ない、此の三日の内、キヤシオを殺し、同時にデズデモーナを殺して恨を晴さうと、憤怒の形相すさまじく、拳を握り、眼を怒らしてイヤゴーと共に奥へ入いつて行く。

【四】の一

城の前

デズデモーナは、夫より愛の紀念にとて貰った大切な手巾を紛失したので侍女の

エミリヤに向ひ、手巾の事を訪ねて居る、すると其所へオセローが入つて来て手巾を借せと云ふ。

デズデ「こゝには持つて居りませぬ」

オセロ「をらぬ？」

デズデ「はい、をりませぬ」

オセロ「それは不都合ぢや！、あの手巾は、埃及の女が俺の母に呉れた品ぢやその埃及女は魔法使で、人の心は大方は見通した、その女が母に言ふには、若し此の手巾を持つてお在になれば、愛嬌が増して父上の愛を自由にすることも出来るが、若しそれを失するか、それとも、人に與るやうなことがあるば、父上の愛を失ひ、父上は心を餘所に移すであらうと、爾う言たのぢや。母上は終焉の際に、それを俺にお譲なされて、若し、其方が妻を娶る日が来たら、其時は此手巾を妻なる女にやれよと仰られた、それ故、其方に遣はした

のぢや、されば其方は氣をつけて、あれを自分の呪のやうに大切に仕たが可
い、あれを失くしたり、または人に遣はしたりすれば、其方の身の破滅ぢや」
デズデ「そのやうなことが、ありませうか？」

オセロ「全くぢや、あの織物には魔力があるのぢや、太陽が二百回周る間、世
を回しつゝと云ふ魔女が刺繍したのぢや、又貴い蠶があの絹を育て、それを
染めたのは、秘法家が、少女の心臓の木乃伊から染めたのぢや」

デズデ「まこと！それは本統の事で御座りまするか」

オセロ「まことの事ぢや、それ故大切に仕たがよい」

オセロは、手巾を取つて来て見せよと云ふ。デズデモナーはそれを聞き入ず
して、それよりはキヤシオ殿を復職さして下されい、そのやうな、手巾の事を
被仰るのは、キヤシオどのゝ事を外せやうとするためぢやと、二人は互に言ひ
争ふ。

オセロは、デズデモナーが手巾は持つて来て見せぬ故に、愈々不審の思ひが
募り、憤然して又も奥の一室へ入つて行く。

その後へキヤシオが来て、デズデモナーに又もや復職の事を頼み入る、けれど
も今日は良人の機嫌が悪い故、又機を見て話さうと言ふ。

デズデモナー自身に取ては自分に對する良人の仕打が不思議に堪へぬけれど、
何か政事の事か、それとも公用の事で、心痛して居られるために、あの林に
御機嫌がお悪いのであらうと考へて、僅に心を慰めて居る。

キヤシオが獨り悄々と家路就かんとして居る所へ、驟て馴染を重ねて居るピヤ
ンカと云ふ情婦が來かゝる。ピヤンカは此頃キヤシオの足か遠のいたのを打ち
怨じて居る間に、不圖、キヤシオの持つて居る手巾に目をつけ、
ピアンカ「それは何處から來た品ぢや、大方新らしい好い人からの進物ぢやら

と、嫉妬を起す。

キヤシオ「決してそのやうな品ではない、誰れか私の部屋へ落して行つた品ぢや、餘りに模様が良い故、取に來ぬうちに、汝は此の模様を寫して置きやれ」
恠う言つてキヤシオはそれをピヤンカに借してやる。

『四』の一

サイアラスの城の前

イヤゴーはオセロに向ひ、男と云ふものはよく已惚話をするもので御座りますから、閣下は小影で見えてお在なされませ、そして、あのキヤシオ奴が、どのやうな事を仕て、どのやうなことを話し居るか、御覽なされませと言ふ。

一 口 セ オ

オセロは企みのあることゝは知らずして小影に隠れて居ると、イヤゴーは其處へキヤシオを連れて來て、巧みに話しかけては、先程の情婦ピヤンカの惚話をさす、

それを小影より見聞きして居るオセロは、てつきり、我が妻のデズデモーナの惚話を仕て居るものと思ひ込み、愈々デズデモーナを殺害しやうと決心する。

かくて、キヤシオの去つた後でオセロはイヤゴーに向ひ、何か毒薬を取つて來て呉れよと頼む、すると、イヤゴーは、
イヤゴ「毒薬はお止めなされませ、不義を働いた床の中で縊り殺した方が、よろしう御座いませう」

オセロ「至極ぢや、因果應報は氣に入つた」

イヤゴ「それからキヤシオは手前が殺しませう、いづれ後まで吉左右お知

せ申しませう」

一ロヤオ

恰度其處へヴエニスから、デズデモーナの親戚に當るロドヴィコーと云ふ人が
ヴエニス公爵の御教書を持つて、使者として渡航て來る、その教書の内容は、
キヤシオを代理人にして、一旦オセローに歸國せよと云ふのであつた。
ロドヴィコーは、オセローが教書を讀んで居る間、デズデモーナに向ひ、「キヤ
シオ殿は何うせられた」と問ふ、するとデズデモーナは、
「あの方と夫とが交誼をやぶらねばならぬ様なことが起つて、困り果てゝ居り
まする、なれども、貴下のお力を借りたならば、首尾よく鎮まらぬことも御
座りますまい」
と言ふ、それを聞いたオセローは、嫉妬の念がむらくと起り、人前をも憚ら
ずして、散々にデズデモーナを打擲する。

一同の者は、名望ある將軍が、人前をも憚らず斯る亂暴な事をするとは意外千
萬である、これは全く吾々が將軍の人物を見誤つたためであると思ふ。

【四】の二

場内の一室。オセローとエミリヤと入る

オセロー「すりや、汝は何も見なんだか。」

エミリ「聞いたことも御座りませぬ、疑はしう思ふた事も御座りませぬ。」

オセロー「汝は彼女がキヤシオと一緒に居る處を見たまらうな」

エミリ「けれども其時には何の不都合も見受けませぬ、其時お二人のお話した

された事は残らず妾が聞いて居たので御座ります」

オセロー「小聲で何か言ひはせなんだか。」

エミリ「決してそのやうな事は御座りませぬ。」

オセロ「汝を外へ出しはせなんだか。」

エミリ「決して。」

オセロ「扇を取つて来いとか、手袋や假面や、其他の物を取つて来いとか言ひはせなんだか。」

エミリ「いゝえ、決して。」

オセロ「それは不思議ぢやな。」

エミリ「御前様、妾は妾の命に掛けても奥様が御貞實で在らせられますことを請合ひます。若し貴方様がお疑ひなら、其の疑がひをお棄てなされませそれは邪推で御座ります。若し悪者が、貴方様の頭腦の中に其の様な疑ひを起さすならば、其奴は蛇の呪ひに掛りをれ！若し奥様が貞實でなく、眞實でないならば、此世の中に果報な男は一人も御座りませぬ——此世の中の一

番の貞女迄が不義者ぢやによつて——」

オセロ「彼女を此處へ呼んで呉りやれ、さあ早やう行け——さあ早やう行けハエ

ミリヤ入る）彼の女は充分に話しをつた——なれとも、娼婦の周旋女があれ

程に云ふのは當然の事ぢや、彼女は敏捷い奴で、不義の秘密を隠して置く鐘

笥の鍵のやうな女ぢや。なれども俺は彼奴が跪いて祈禱をするのを見た」

（エミリヤと共にデズデモーナ入る）

デズデ「御前、何の御用で御座りますか。」

オセロ「どうぞ、此方へ来て呉りやれ。」

デズデ「何で御座りますか。」

オセロ「眼を見せて呉りやれ、俺の顔を見をれ。」

デズデ「まあ、何と云ふ恐ろしい思ひ付きで御座りますか。」

オセロ、（エミリヤに）「これエミリヤ、汝はいつもの勤めをして呉れ、二人丈

を殘して戸を閉めて參れ、若し人が來たらば、咳拂ひをするか、エヘンと
ふのぢや。いつもの内證事を——さあ早く行け、さあ早くせい。」(エミリヤ
去る)

デズデ「跪いて申します、何故に其のやうな事を仰せになりますか。言葉
の様子で怒ってお出でなされまるとは知つてはれど、仰しやる言葉の意味が
分りませぬ。」

オセロ「はて、汝は何者ぢや。」

デズデ「貴方の妻で御座ります、貴方の貞實な妻で御座ります。」

オセロ「誓言して地獄に落をれ、さもないと汝の顔が天人の一人とも思はれる
ので、悪魔も汝を捕へぬかもしれぬ。それぢやによつて正直ぢやと誓言して
二重の罪に落ちをれ。」
デズデ「それは天道様が御存じぢや。」

オセロ「まこと大は汝が不義をしをることを、御存じぢやわい。」

デズデ「え、貴方、妾が誰に？誰と？何うして不義を？」

オセロ「え、デズデモ！あちらへ行け、あちらへ、あちらへ！」

デズデ「あゝ、切な！何でお泣きなされます、其涙も皆妾が因で御座ります
るか、若しや、ひよつとして今度の御台返しを妾の父の仕業ぢやと御疑ひな
らば、それを妾の咎になされまするな、若し貴方が父と義絶なされまするな
らば、妾もまた父と縁を断ちませう。」

オセロ「若し天が、艱苦を以て俺を試すならば——あらゆる苦痛や恥辱を此輩
頭に振り注ぐならば——貧苦の淵に唇まで深く此身を涵すならば——我身を
も、我大切な望をも、縁に落して了はれるならば——俺は魂の他處かに一滴
の忍耐を殘して居らうものを——。あゝ、無念ぢや。いつまでも人に後指さ
ゝれて嘲りの的とならねばならぬとは——、さりながら、それも忍ぼう、堪

忍しやう、十二分に。なれどもわが心を秘めて置く寶の庫、命の流れの濁る
も湧くも、一つで定まる泉を、蝦蟇を交尾ます水溜りに仕やうとは！、
……あゝ今こそは、薔薇の唇を持つて居る天の使も、惡魔に變り居れ！」

デズデ「妾を貞實ぢやと思ふて下さりませうなあ。」

オセロ「おゝ貞實ぢや。肉店に群がつて卵を生み付ける最中に交尾み居る夏の
蠅虫のやうに貞實ぢや。おゝ汝は毒草ぢや。眼も鼻も痛うなる程、色も美し
い、香も高い毒草ぢや——え、寧ろ、生れて來をらなんだならば！」

デズデ「あゝ、悲しい。妾は自分で知らぬ何のやうな罪を犯したのやら」

オセロ「此美しい神は、此立派な書物は、上に「姪婦」と書かう爲に、作らせた
のか。のやうな罪を犯したと言やるか？ 犯したとも——此賣女奴。若し汝
の惡事を口外したならば、俺の頬は鍛冶場のやうになつて廉恥心が燃え層に
なつて了ふわい。何を犯したと？ 天も鼻を敵ふ。月も眼を閉じ、出逢ふ者毎

に接吻を與へる多情はしい風さへも、地の洞穴に隠れて、それを聞くまいと
するに。何を犯したと？ 此厚顔い賣女奴！」

デズデ「それは餘りで御座ります」

オセロ「では汝は賣女でないと言やるか。」

デズデ「いゝえ、妾は基督信者で御座ります。若しも此書を夫の爲に守り、
道ならぬ者に觸れぬやうにすることが賣女でないならば、妾は決しい其やう
な者では御座りませぬ。」

オセロ「では賣女ではないと云ふのか。」

デズデ「はい。妾は救はれる身ぢや故に」

オセロ「其のやうな事があらうか。」

デズデ「おゝ天よ死し給へ」

オセロ「それならば、濟まぬ事をした。俺は汝をばあのオセローと結婚したべ

ニスの狡猾い賣女と取り間違へた。(奥に向ひ)おい、内儀、渠ピーターとは
反對な地獄の門番をする内儀や！(デズデモーナ、泣き倒れる、エミリヤ又
入り来る。)汝ぢや、汝ぢや。さうぢや、汝ぢや。俺達の用は済んだ。さあ之
が骨掛り貫ぢや。どうぞ錠を下して黙つて居つて呉れい。(財布をエミリヤ
の前へ投げ出して去る)

エミリ「悲しや。御前様は何を思ふてお出でなさるのでらう？(デズデモーナ
に)奥様、何うなされました。奥様。」

デズデ「半分は夢を見て居るのぢや。」

エミリ「御前様が何うなされたので御座りまする」

デズデ「誰が？」

エミリ「はて、御前様が」

デズデ「御前様とは誰の事ぢや、」

エミリ「貴方の御前様で御座ります。」

デズデ「妾には殿御はないのぢや。妾に言を云ふて給もるな、エミリヤ、泣く
ことも出来ねば、返事することも出来ぬ。唯涙が零れる許りぢや、どうぞ、
今宵は妾の寢床に婚祝の敷布を掛けて給もれ——よいナ———そうして汝の
夫を呼んで給もれ」

エミリ「これは、まあ何んと云ふ事ぢややら！」(去る)

デズデ「妾が何のやらなことをしたのぢややら、僅か許りの過ちが妾にあつた
とて、腹をお立てなさるとは？」

デズデモーナは、イヤゴーを呼び寄せ、良人の機嫌を直すには何うしら可らうか
と、泣き口説く、イヤゴーは、「何か政事向の事がお氣に障つたので、それ故八
當りをしてお在なるので御座いますから、今に御機嫌が直りませう」と言つ
て慰める。

其の後にイヤゴは、かの痴呆者のロデリゴに會ふ。

ロデリゴ「イヤゴに向ひ、

ロデリ「おぬしの仕向けは餘りぢや、己に望みを遂げさせやうとはせず、遂さすまいと計りして居る」

イヤゴ「いや飽まで俺はお前のために正直に骨を折つたのぢやが……若し明日の晩にデズデモーナが手に入らなんだら、その時こそは、人を陥入れた罪で予の命を取るがよい、どのやうな恐ろしい機械なりと工夫して」

ロデリ「そりや、一體どの様な事ぢや」

イヤゴ「實はヴェニスから使者が来て、キヤシオがオセローの代人になることになつた」

ロデリ「それは本統の事か、さすればオセローもデズデモーナも國へ歸るの

ぢやな」

イヤゴ「何か此處に留まるやうな事件でも起らぬ限りは、夫妻ともモーリダニヤに往くぢやらう、就ては、その足留めをするには、キヤシオを片付けるのが何よりぢや」

ロデリ「と云ふのは？」

イヤゴ「無論ぢや、オセローの代理になられぬやうにキヤシオの腦天をうら辞くのぢや」

ロデリ「さうして、それを俺にせいと言ふのか」

イヤゴ「は、俺も助太刀してやるから、今夜奴がビヤンカの家から歸る所を挟み打ちにしてやらうと云ふことに、相談一決して二人は別れる。」

『四』の三

オセロー、ロドヴキコー、デズデモーナ、エミリア並びに従
未出る。

一ロセオ

ロドヴ「いや、何うぞ最早おかま、下さるな」

オセロ「なに、失禮ぢやが、歩くのは拙の勝手ぢや」

ロドヴ「奥方御般みなされ、御厚志の程は忝なう御座つた」

デズデ「ようこそお出下さいました」

オセロ「さ、歩きませう、——おゝ、デズデモーナ」

デズデ「何で御座いますか」

オセロ「直ぐと寝んだか可い、間もなく歸つて参るから——、傍のものは法び
てな、よいか」

デズデ「はい」

オセロー、ロドヴキコー、従者等入る。

エミリア「何のやうで御座りまする、先程よりはお優しう見えまするな」

デズデ「直と歸て来ると被仰つた、其方を退けて床へ入つて居れとの御命令で
あつた」

エミリア「妾を退けて！」

デズデ「爾う仰せになつな程に、エミリア、其方は妾の廢衣を持って来て、退り
や、お氣に逆らうてはならぬから——」

エミリア「ほんに、由様、あのやうな方にお逢ひなさらなければ、宜ろしう御座
いましたに」

デズデ「妾は爾うは思はぬ、愛しと思ふ心には、無情のも、叱らるゝのも、怖
いお顔も——、一寸と針を外して給もれ——、善い様に見えるわいな」

エミリ「お言ひつけの寝布は、お床へ布いて置ませうか」

デズデ「昔な同じことぢや、まア、何と云ふ阿呆らしいことであらう、——若しも、妾が其方よりも先に死んだならば、その寝布の一枚で包んで給も」

エミリ「まア、何を被仰りまする」

デズデ「妾の母の侍女にバアバラと云ふ女があつた、愛し可愛と思ふ男が氣が狂ふて、女を棄て了ふた。——其の女はいつも柳の歌を唱ふて居た。古い歌ぢやが、よう女の身の上を唱ふて居た、——それを歌ひながら女は死にやつた。今宵はその歌が忘れられぬ、首を片方へ傾げて、あの哀れなバアバラの様に、その歌を歌ひ度ひ、何うぞ、早うして給もいなう」

エミリ「夜のお召を取つて参りませう」

デズデ「否え、針を外して給も、——それから、あのロドウキコー様は立派なお方ぢやなア」

エミリ「ほんに、立派な殿御で御座ります」

デズデ「辯説もさはやかなおかたぢや」

エミリ「ヴェニスのお方、あの唇に觸ることが出来るならば、パレスチナまで、跣足詣を仕やうと仰せになりました」

デズデ(歌ふ)

あはれの娘は、シカモアの
樹蔭に坐りて、吐息する、
歌ふ柳よ、青柳

胸に手を當て、膝には頭、
歌ふ柳よ、青柳

傍を流るゝ、いさゝ川
共音に泣くぞ悲しけれ、
歌ふ柳よ、青柳！

落す涙に、
石さへ軟む

(上衣を脱ぎながら)

デズデ「これを、其方へ——、最うお歸りなされやう程に……」(又歌ふ)……

歌へ青柳、此の身の飾り

目に咎めはなきものを、
唯我が身こそ怨みなれ。

デズデ「あれ、扉を叩くのは誰ぢややら……」

エミリ「いええ、あれは風で御座います」

デズデ(又歌ふ)

主を存氣と咎めた時に

何と答へをされたやら？

柳、柳、青柳！……

デズデ「さ、行きやれ、——眼が痒ふなつた、涙の出るしらせぢや？」
デズデ「モーナは侍女を退らせて、一人寢床に入った、それが再び覺めやらぬ死
の寢床とも知らずして——」

【五】の一

サイプラスの街、

一ロセオ

イヤゴとロデリゴと出る。

イヤゴ「此の蔭に立つて居られ、今に來やう、細身の刀を抜いて置いて、しつかりやるのぢや、早く、早く、——何も恐がる事はない、御手前の傍には身共が附いて居るのぢや、一か八か、これで定る、確かに腹を据えて掛られい」
ロデリ「傍に居ておくりやれ、遣り損ふかも知れぬ」
イヤゴ「御手前の傍に居る、確かになされい」

イヤゴ入る。

ロデリゴは、元來臆病者であるから、此様なことは好まぬのであるが、イヤ

ゴが勧める儘に、今しもキャッシュを待伏して殺さうとして居る。

一方イヤゴの方では、キャッシュが殺されやうとも、又、反對にロデリゴが殺されやうと、少しも苦痛ではないのである。彼れに取つては二人の何れが殺されても利分なのである。と云ふのは、イヤゴは、これまでにデズデモーナを取持つと言つて、ロデリゴから多額の金銀を騙むき取つて居るのであるから、殺されて呉れれば、面倒が除けて結構なのである、又、キャッシュが活きて居ては、何時も自分のすること爲すことが、拙劣く見えてならぬ、自分の出世のためには、何うしてもキャッシュを除かねばならぬ。

恚う云ふ次第であるから、互いに此の二人を闘はすことは、自分に取つては此の上もない事である。

待伏して居るものがあるとは、露知らぬキャッシュは一人で此處まで來かゝる。

躑て足つきに覺えのあるロ德里ゴは、

ロ德里「おのれ！命は貰うた！」

と討り、キヤシオに突いてかゝる。

キヤシ「その二突で殺れる所ぢや！なれど俺の着込は貴様のよりは強い替ぢや

さ貴様のを試して呉れやう」

劍を抜いてロ德里ゴを突く。

ロ德里「あ！やられた！」

此の聲を聞きつけて、イヤゴは、背後よりキヤシオの脚を刺して、入つて行く。

キヤシ「あゝ、一生不具の身となつた、助けて呉れ、人殺しぢや、人殺しぢや！」

キヤシオは其處に付ふれて了ふ。遙かよりオセロは聲を聞きつけ

オセロ「あれは確かにキヤシオの聲ぢや、——イヤゴが約束通りに殺したと

見える」

ロ德里ゴは付れたまゝ

ロ德里「あゝ悪い事を仕たわい」

と今更悔悟の眞子である。

オセロ「果して彼奴ぢや——おゝ勇敢な、忠實なイヤゴ、其方は、友の耻を

それ程までに思ふて呉れたか、——姦婦め！對手はもう死んだぞ、其方の末

路も、前ぢや、おのれ！淫婦め、邪淫で汚した腹床に、其方の血を流して呉

れやう」

斯く言つてオセロは入つて了ふ、引ちがへに來たのはロドヴゴと、グラシ

ヤノ（デズデモーナの叔父）である。

キヤシ「おい、おい、人殺しぢや、人殺しぢや！」

グラシ「や！何か珍事ぢや、あの叫び聲の恐ろしい事わい！」

キヤシ「助けて呉れ！」

ロドヴ「や！」

ロ德里「俺は悪黨ぢや」

ロドヴ「二三人の呻き聲ぢや。——あゝ恐ろしい夜ぢや、誘き寄せられるのかも知れませぬ、もつと人が参つてから、聲のする方に近よらねば、危険で御座る」

ロ德里「あゝ、誰れも来ては呉れぬか、血が止まらぬで死んで了ふぢやらう」

其處へイヤゴは炬火を持つて出て来る。それと見たグラシヤノは
グラシ「あすこへシヤツ一枚で、炬火と武器を持つて来たものが御座る」

イヤゴ「其處に居るのは誰れぢや、人殺々々と叫ぶのは誰れぢや」

ロドヴ「吾々は知らぬ」

イヤゴ「呼聲をお聞なされなんだか」

...

イヤゴ「や！何うしたと云ふのぢや」

グラシ「あれはオセロー殿の旗手ぢや」

ロドヴ「左様で御座る、あの勇敢な旗手で御座る」

イヤゴ「悲し相に其處で呼んで居るのは誰れぢや」

キヤシ「イヤゴ、俺は傷られた、悪漢にやられたのぢや！助けて呉れ！」

イヤゴ「おゝ副官殿か、如何な悪者にやられたのぢや！」

キヤシ「一人は其處ら邊に居る筈ぢや、さう逃げ居らなんだから——」

その時、息も絶々に仆ふれて居るかのロ德里ゴは、苦し氣に、

ゴ德里「おゝ、俺も助すけて呉れい！」と叫ぶ。

キヤシ「おゝ、彼奴めがその一人ぢや」

イヤゴ「此の人殺しめ！此の悪者め！」

イヤゴは走り寄つて、ロ德里ゴを突き刺す。それと見たロ德里ゴは怨め

し相に、

ロ德里「此の極悪人のイヤゴーム！犬畜生め！」

と叫びつゝ息は絶えて了ふ。

一同は其處でキヤシオを椅子に乗せて、手當をするために擔いで行く。

イヤゴームは飽までも、善人面をして一同の前を繕らうて居るが、死んだロ德里

ゴームの匿の中に、自分の悪事を書き認めた手紙が、後に現はれて來やうとは

流石の悪黨も、其處までは氣が付かなかつた。

「五」の二

場内寢室

デズデモノナ腹臺の上に睡る、燈火輝く、オセロー人來る、

オセロー「これが爲ぢや、これが爲ぢや、我靈——此事を言はせて呉れるな、汝

清き尾よ——これが爲ぢやわい。——とは言へ彼女の血は流すまい、また、

雪よりも白く、雪花石よりも滑らかな彼女の肌には傷を付けまい、けれども

生かしては置かれぬ、若し生かして置いたならば、またも男を迷はすであら

う、燈火を消して、それから、——燈火を消すのぢや、汝燃ゆる僕よ、汝は

消えたとして若し惜しいと思ふならば再び元通りにする事が出来る、なれども

一度汝の燈火を消す時は、汝、巧を盡して拵へられた自然の傑作よ、何處に

プロメシユの火を燃たしめるものがあらうぞ。一度薔薇を摘み取つたか

らには何うして再びそれを咲せやう、必らず萎んで了ふぢやらう、花が枝に

ある中に香を驕らよ。

(デズデモノナに接吻する)
あゝ香ばしい息ぢや、正義の神様とても、之が爲には劍を御折なされるであ

らう——いま一度、又今一度——汝は死だとても此様に居て呉りやれ、さす

れば、我は汝を殺して置て又可愛がるであらう、——もう一度、之が最期ぢや、此様に可愛うて、又、此様に恐ろしい奴があらうか、俺は泣ずに居られぬ、なれども此涙は酷い涙ぢや、が併し此怨みは清い怨ぢや、可愛ければこそ打ちもする——さ、目を覺せ、」

デズデ「其處に居やるは誰ぢや、お、オセロー殿か」

オセロ「さうぢや、デズデモーナ。」

デズデ「貴方はまだお寝みなされませぬか。」

オセロ「今夜の祈禱はもう済んだのかデズデモーナ。」

デズデ「はい、済ませましたわいな。」

オセロ「若し汝が天のお許を願ふて無い罪があると思ふなら、直ぐに御願した
がよからう。」

デズデ「まあ、貴方、夫は何う云ふ意味で其のやうなことを仰しやるので御

座りまするか」

オセロ「はて、早う、早うしたがよい、予は歩いて居らう、歩いて居らう、また覺悟の出来ぬものを殺し度うはない、いゝや——そのやうな事は決して出来ぬ——予は汝の靈を殺し度うはない。」

デズデ「殺すと仰しやるのは？」

オセロ「さうぢや、殺すのぢや。」

デズデ「あゝ、あゝ神様、お助け下さりませ。」

オセロ「我が全心を以て、何卒！」

デズデ「そのやうに仰しやる處を見れば、よも妾を殺しはなさるまい。」

オセロ「フム。」

デズデ「なれども恐ろしいわいな、そのやうに眼をギョ口付かしてお出でなされまするのを見ると、恐ろしいわいな、何故恐ろしいのやら妾にも分らぬ、

悪い事をしたとは思はぬによつて、——なれども妾は恐ろしうてならぬ。」

オセロ「汝の罪を思ふたがよからうぞ。」

デズデ「貴方を愛しと思ふ心より外には、罪としては外に御座りませぬ。」

オセロ「さうぢや、其故に汝は殺されるのぢや。」

デズデ「夫はあまりで御座ります、愛しう思ふて居るものを殺すとは——まあ

何故そのやうに貴方は下唇を噛ませられます？何か恐ろしい事を思ひ立つて

居られまするな、其の唇を噛むのが前兆ぢや、なれども、よもや、妾が其

の目的になるのではあるまい。」

オセロ「しつ！これ静にせい！」

デズデ「はい、まあ、何うしたので御座りまする。」

オセロ「汝は予が大切にして居つたあの手帛をキャシオに遣つたな。」

デズデ「命にも、靈にも掛けて誓ひまする、どうぞ、どうぞ、彼人を呼びに遣

つて尋ねて見て下さりませ。」

オセロ「これ、氣を付けたがよいぞ、偽りの誓をせぬやう、氣を付けたがよい

ぞ、今汝は死の床の上に居るのぢや。」

デズデ「でも、まだ死にませぬわいな。」

オセロ「いや、直ぐに死ぬのぢや、それ故、汝の罪を悉く白状したがよい、誓

言して、一つ一つ事實を拒んでも汝が予を之程苦しめて居る其心を消すこ

とも、除く事も出来ぬわいな、汝は殺されるのぢや。」

デズデ「あゝ、それならば神様よ、どうぞ恵を垂れさせ給へ！」

オセロ「おゝ、何卒！」

デズデ「夫なら、貴方にもまた御慈悲心が御座りまするか、妾は之まで貴方に

遂ぞ罪を犯した事は御座りませぬ、また、キャシオ殿を愛したことも御座り

ませぬ、若し愛したにした處が、夫は何憚ることもないやうな愛し方で御座

りました、おぞ物なぞ遣はしたことも御座りませぬ。」

オセロ「いゝや、予は、彼奴が予の手帛を持つて居るのを見た、此偽り女奴、汝は予の此を石のようにし居る、汝は予が犠牲と思つて居つたことを虐殺にさせやうとしをる、あの手帛を予は見た事があるのぢや。」

デズデ「若しさうならば夫は拾ふたので御座りませう、妾は決して夫をあの人に遣はしませぬ、彼人を此處へ呼んで眞實の事を白状さして下さりませい。」

オセロ「奴が白状して下さるのぢや。」

デズデ「え、何と申したので御座りまするか。」

オセロ「彼は汝と通じたと白状しをつた。」

デズデ「え、何うして？不義密通を！」

オセロ「さうぢや、さうぢや！」

デズデ「そのやうな事は申しは致しますまい。」

オセロ「いや、彼の口はもう塞がれた筈ぢや、正直なイヤゴーが處分した筈ぢや。」

デズデ「まあ、何と云ふ恐ろしい——もう死なしやれたか？」

オセロ「奴の髪の毛が一條々生さて居らうとも、予の復讐心は癒されぬ。」

デズデ「あゝ、あの人は讒言されたのぢや、さうして此身も破滅ぢや。」

オセロ「此姪婦奴、予の面前で、彼の爲に泣きをるか。」

デズデ「もうし、妾を、追出して下さりませい、なれど殺さいて——」

オセロ「下に居れ、此姪婦奴。」

デズデ「明日殺して下さりませい、今宵は助けて置いて——」

オセロ「いゝや、ならぬ、汝が抗がひ居る以上は」

デズデ「では、唯つた半時なりとも」

オセロ「定つたからには猶ほはならぬ」

デズデ「けれどもお祈禱をする間。」
オセロ「え、もう遅いわい」

(オセロ、デズデモーナを壓殺す)

エミリヤ(奥にて)「御前様、御前様、もうし御前様、御前様。」

オセロ「あの騒ぎは何事ぢや——まだ死なぬか、まだ死に切らぬか、酷い予にもまだ情けはある、汝の苦痛を長引かせて置き度うない——恚うして呉れる」

エミリ(奥にて)「もうし、御前様！御前様！」

オセロ「誰ぢや」

エミリ(奥にて)「もうし、御前様、一言申し上げ度い事が御座ります」

オセロ「うむ、——エミリヤか、——今直ぐに——あゝ死んで了ふた——エミリヤはキヤシオの死んだことを話して来たらしい、偉い騒ぎぢや——あゝ、あゝ、もう動かなくなつた、墓のやうに静かになつた——エミリヤを呼び入

れやうか、呼び入れてよいかしら？——あゝまた動いたやうぢや——ではな
い——何うしたらよからう？入つて来たならば、エミリヤは屹度妻に言を
ふであらう、妻に！妻に！何に妻？予には妻は無い筈ぢや、あゝ堪へられぬ
！、切ないことぢや！今こそ恐ろしい日蝕と月蝕が始まり、恐れ戦く地球は
裂け開いて了ふであらう。」

エミリ(奥にて)「申し上げ度いことが御座ります、御前様」

オセロ「おゝ、忘れて居つた、入れ、エミリヤ——待て、今直ぐに——帷を引
いて置かう、汝は何處に居るのぢや、何事が起つたのぢや。」

(戸を開く、エミリヤ入来る)

エミリ「御前様、彼處に恐ろしい人殺しが御座りました」

オセロ「今か？」

エミリ「唯つた今で御座ります。」

オセロ「夫は月の地位が變つたからぢや、いつもよりも下界に近く月が居るから人間が發狂するのぢや。」

エミリ「あのキヤシオ様がロデリゴと云ふ若いベニスの人を殺さつしやりました。」

オセロ「ロデリゴが殺された！そしてキヤシオも殺されたか。」

エミリ「いえ、キヤシオ様は殺されはなされませぬ。」

オセロ「何、キヤシオが殺されぬ、夫では人殺しの順が狂ふた、心地よい復讐と思ふた事が無念と變つて了ふた。」

デズデ「あゝ、あゝ、冤で殺されたのぢや！」

エミリ「あれ！あの泣き聲は！」

オセロ「あの泣き聲とは！何が？」

エミリ「あれ！あれは奥様のお聲で御座りまする、(ベッドに駆け寄りて帷を開

る)あれ！あれ！誰ぞ助けて下さりませい！奥様！奥様！もう一度言を言ふて下さりませ、奥様！奥様！言を仰しやつて下さりませ。」

デズデ「罪なうして妾は死ぬのぢや。」

エミリ「おゝ誰が此のやうな事を致しました。」

デズデ「誰でもない、妾故に、さらばぢや御様へよう申したもれ、さらば

ぢや！さらばぢや！」(デズデモーナ死す)

オセロ「あゝ、何うして殺されたのであらう？」

エミリ「誰が知りませうぞ」

オセロ「予ではないと言ふたのを、汝は聞いたではあらう」

エミリ「さう仰しやりました、眞實の事を人に知らせねばなりませぬ。」

オセロ「女奴は嘘言を吐いた故に焦熱地獄に落ちるであらう、眞實彼女を殺し

たのは此の予ぢや」

エミリ「さうならば、奥様は尙と美はしい天使ぢや、貴方様は尙と恐ろしい悪魔ぢや」

オセロ「女は不義を働いた、彼女は淫婦ぢや」

エミリ「嘘言を仰りまするな、貴方こそ悪魔ぢや」

オセロ「彼女は水のやうな浮氣女ぢや」

エミリ「貴方は火の様な粗暴な男ぢや、貴方は奥様を不義者ぢやと仰しやるがほんに奥様は貞實なお方であつたものを、」

オセロ「キヤシオが彼女と通じたのぢや、汝の夫に聞いて見い、若し正統の理由なくして、此様な思ひ切つた事を遣り送げたならば、予は奈落の底に落ちるぢやらう、汝の夫が一切の事を知つて居る」

エミリ「妾の夫が？」

オセロ「さうぢや、汝の夫ぢや、」

エミリ「奥様が不義をして居られましたと？」

オセロ「さうぢや、あのキヤシオと若しも彼女が不義を仕て居らんなら、假令天道様が、無瑕の金剛石を以つて、別の世界をお造りなされやうとも、彼女と交換はせまいものを——」

エミリ「妾の夫が？」

オセロ「眞先に予に知らせて呉れた、彼は正直な男故、不埒の所行は蛆虫の排泄程に憎むのぢや」

エミリ「妾の夫が？」

オセロ「何でそのやうに繰り返して問ふのぢや、いかにも汝の夫が話したのぢや」

エミリ「奥様、悪漢が眞情を嘲弄しをつたので御座りまする、妾の夫が奥様を不義者ぢやなど、申して——」

オセロ「如何にも汝の夫が、分つたか、女、予の親友で汝の夫である、あの正直なイヤゴが。」

エミリ「若しあの人があるやうなことを言ふたのならば、あの人の大膽な靈は一日に一分づゝ腐りをれ！ほんにあの人は嘔吐ぢや、奥様は此醜劣に惚れ過ぎて御用でなされたのに」

オセロ「やあ！」

エミリ「此上にも悪いことをなさるがいゝ、貴下が、奥様の配偶であつたことさへ、勿體ないことであつた。」

オセロ「黙れ、黙つたが汝の爲ぢや、」

エミリ「貴下は、妾を何うする力もないのぢや、此痴愚者奴が、此阿呆奴が、塵埃のやうな物知らずが、汝に何が出来やうぞ、劍などは恐しいとも思はぬ妾は此事を言ひ觸らして遣らうわいな、假令二十度殺されやうとも——あれ

助けて、助けて、助けて、ムーアが奥様を殺したわいな、殺人ぢや！殺人ぢや！

(モンタノー、グラシヤノー、及びイヤゴ等入り来る)

モンタ「何事ぢや、(オセロに)何うなされました閣下、」

エミリ「オ、イヤゴ殿、御座つたか、お前は人のした殺人の罪を自分の身に背負ふとは、ほんに利巧なお人ぢや、」

カラシ「一體何うしたのぢや、」

エミリ(イヤゴに)お前が男なら、此奴に嘘ぢやと言ひ張つて下され、奥様が不義をなされたとやら、お前が言ふたと此男は言ひをる、妾はお前が其やうなことを言しやりはせぬと思ふ、お前は其やうな悪者ではない、さア、話して下され、妾の胸は張り裂けるやうぢや、」

イヤゴ「俺は、俺の思ふた通りを言ふたのぢや、御自身でも眞實と思ふて居な

さる通りを仰しやつたのであらう、」

エミリ「けれどもお前は、奥様が不義をなされた杯と言つしやりはせまいな」

イヤゴ「いゝや言ふた、」

エミリ「お前は嘘吐きぢや、恐ろしい嘘吐ぢや、嘘も、嘘も、酷い嘘ぢや——」

奥様がキヤシオ様と不義をなされた杯とは！——お前はキヤシオ殿と不義を

なされた言はしやつたか、」

イヤゴ「キヤシオとぢや、これ黙つて居れ、」

エミリ「いゝや。黙らぬわいな、妾は言はねばならぬ、奥様は此床の中に殺さ

れておいでなされます、」

一同「えエ——」

エミリ「お前の言はしやつたことが因となつて敢ない御最期ぢや、」

オセロ「いや、方々、怪まれな、事實其通りぢや、」

クラシ「其は不思議な事ぢや、」

モンタ「奇怪千萬な事ぢや、」

エミリ「之は悪企ぢや、恐ろしい悪企ぢや、あゝ、其を思ふと——妾はさう思

ふ——屹度悪企みぢや、妾は、あの時もさう思ふたが——あゝ苦しうて、苦

しうて死んで了ひ度いわいな——悪企みぢや、悪企みぢや、」

イヤゴ「え、汝は眼でも狂ふたか、宿へ歸りをれ、」

エミリ「皆様、妾に言を言ふのをお許し下さりませ、夫の言葉に従ふのが當然

なれど今はきゝませぬわいな——（イヤゴに）妾は多分もう家へは歸りませ

ぬぞい、」

オセロ（デズデモーナを見て）「あゝ！あゝ！あゝ！あゝ！」（ベッドの上に倒れ伏す）

エミリ「其様に倒れて、呻いて居つたがよからう、汝は此世の中に生きて居つ

た一番優しい罪のない方を殺しをつた、」

オセロ (起さ上つて)「おゝ、おゝ、おゝ、彼女は不義をしたのぢや——(グラシヤフに) 伯父上、貴方とは、氣付きませなんだ、其處に貴下の姪子が寝て居りまする、其息の根を止めたのは、眞實、此の種の腕で御座る、自分も此事を恐ろしい事ぢやと思ひまする。」

グラシ「哀れなデズデモ一ナ！俺は汝の父御が死なつた事を喜びまする、汝の結婚は父御を惱ませ、老の玉の緒を二つに切る程の苦痛となつた。若し今父御が長らへて此有様を見られたならば、心も亂れて、神をも呪ひ、遂には墮落の罪に落ちられたかも知れぬわいな。」

オセロ「哀れなことぢや、なれども女が、キシヤオと百千度不義を働いたと言ふ事は、イヤゴーがよろしく存じて居りまする、キシヤオも亦、夫を白狀致しました。夫に女奴は、拙者が愛の最初の紀念にとて與らせた物を姦夫の愛に報ゐる爲に遣つて了ひました、夫は男の手にあつたのを、現在拙者が見届け

たので御座る。其品と言ふのは、我父が母に贈つた手巾で御座る。」

エミリ「おゝ、おゝ、天道様！神々様！」

イヤゴ「黙りをれ！」

エミリ「いゝえ、言ふわいな、言ふわいな、私に黙れと言ふても、黙りませぬわいな、妾は北風のやうに、勝手に言ふてのけやう。天も人も悪魔も、何が来て妾に怒鳴り付けやうとも妾は言ひませうわいな。」

イヤゴ「階和しう家へ歸へれ、」

エミリ「歸りませぬわいな」

(イヤゴ一丸り寄りて妻を刺し殺さんとす)

グラシ「これ！女に劍を付けるとは？」

エミリ「まあ、此のムーアの阿呆者奴が、汝が今言ふた手巾と云ふのは、妾が拾ふて夫に遣つたのぢやわいな、あのやうな物を妾の夫が取つて呉れいと言

ふて、何度も何度も着面目になつて頼まじやつた程に、

イヤゴ「ウヌ、此の賢女め！」

エミリ「奥様が其手巾をキヤシオ様にお遣しなされたとは、飛んでもない、夫れは妾が拾ふて夫に遣つたのぢや、」

イヤゴ「ウヌ、嘘言を吐け！」

エミリ「神かけて虚言は申させぬ、皆様嘘では御座ませぬ——（オセローに）おゝ、殺人の阿呆奴が、此様な阿呆が、何うしてあのやうな結構な奥様を持つたのであらうか？」

（イヤゴ、エミリヤを突き刺して走り去る）

オセロ「天に石はないか、雷の石の外には石はないか、——極悪人！」

グラシ「女が倒れた、確かに彼は妻を殺しをつた、」

エミリ「さうぢや、さうぢや——何うぞ奥様の傍に横臥して「さりませい」

フロセオ

グラシ「奴め、妻を殺して逃げをつた、」

モンタ「でも、恐ろしい悪黨ぢや。此武器をお取り下され、拙者が只今、ムー

アの手から取返したので御座る、ささ、外に出て戸口を御守り下され、選す

位ならば殺した方が増して御座る、拙者は之よりあの悪者を追ひかけませう

あの極悪人を、

（モンタノーとグラシヤノと入る）

オセロ「あゝ、勇氣迄失ふたか、少し手心ある小僧奴が、我劍を奪ひをる、あ

ゝ武人の名譽も廢つて了ふた、えゝい、何うなとなれ、」

エミリ「奥様！奥様！貴女の歌が前兆になりました、奥様、妾の言葉が聞えま

するか、妾は白鳥の遊びをして、歌ひ乍ら死なうわいな。

（歌ふ）柳、柳、柳の糸——

ムーア殿、奥様は貞女で御座りました、奥様は貴方に惚れて御出でなされたの

に、酷いお方ぢや。妾は眞實を話したから、どうぞ大に昇りまするやうに。妾は思ふた通りを言ふて死ぬるのぢや——死ぬるのぢや、」

(エミリヤ死す)

オセロ「此室にもう一口の劍がある筈ぢや、夫は西班牙の劍ぢや、氷河で鍛ふた劍ぢや、おゝ此處にあつた——(戸の外に向ひ、伯父上此處を御出し下さ

れ、」

グラシ「出やうとするならば一命にも拘はらうぞ、汝が武器を持つて居やらぬ

上は、負を取らねばなるまいぞ、」

オセロ「然らば御覽下されい、そして其上で物を仰せられい。さもなくば無手

なれどお相手致しませうぞ、」

グラシ「何事ぢや、」

腰に帯された例は御座らぬ、拙者は此瘦腕と、此の武器で貴下の二十倍よりも恐ろしい障害を打ち破つて通つた事も御座つたが——入れど、無益な高言ぢや、誰が運命を支配することが出来やう。今は叶はぬ、武器は持つて居りますれど氣遣ひなされますな、之が身共の旅路の果、之が我船の最後の碇泊所で御座る、後退なされますな、夫は無益な恐れぢや。人がオセロの胸に葦一本突き付けても、彼は後へ退りまする——オセロが何處へ行きませうぞ、(デズデモーナの死骸を眺め)今は何のやうな顔をして居やるぞ、さても不幸な女ぢや、汝の襦袢のやうに青白うなりやつた——、審判の日に二人が出逢ふたならば汝のその顔色が俺の魂を奈落の底に投げ落し、悪魔が其を掴むであらう、おゝ、冷たい、冷たい、汝の操のやうに冷たい——あの悪魔が——悪魔よ、此清い面影を、此清い姿を見ぬやうに俺を鞭で追ひ拂つて呉れ、風で吹き拂つて呉れ、硫黄の燄で俺を炙り、火の山の岸で俺を洗ふて

呉れ？おゝ、デズデモーナ！死んで了ふた！デズデモーナ！おゝ！おゝ！
（ロドヴキコー、モンタノ椅子にて擔がれたるキヤシオを伴れ、役人共、召捕られたるイヤゴを伴ひ入る。）

ロドヴ「不運な粗忽な人は何處に御座る？」

オセロ「それはオセロと云ふ男、——此處に居りまする」

ロドヴ「毒蛇奴は何處に居りまする、悪者を引出し召され、」

オセロ（イヤゴを腕みて）「此奴の足を見なければ夫は説話ぢや、若し貴様が悪魔なら、俺はとも殺すことは出来まい」

（イヤゴを突き刺す）

ロドヴ「彼の手より刃をもぎ取り召され」

イヤゴ「手傷は負ふたれど俺は未だ死なぬ」

オセロ「夫を無念とは思はぬ、俺は貴様を生かして置き度い、俺は死ぬるのを

幸福ぢやと思ふて居る！」

ロドヴ「曾て一度は善人であられたオセロ殿、此様な悪者の悪計にかゝつては、何と申してよいやら」

オセロ「はて、何となりと仰せられい、なれど願はくば名譽を思ふての殺人ぢや、恨みの爲でなく、名譽の爲の殺人ぢやと傳へて下されい、」

ロドヴ（イヤゴを指し）「此悪者も其の悪計を大略白狀致した、貴殿は此奴と共に謀してキヤシオを殺さうとなされたのか、」

オセロ「いかにもさうぢや、」

キヤシ「將軍、拙者は閣下のお憎しみを受ける理由は御座りませぬ」

オセロ「拙者も今はさう思ふ、粗忽を許して呉れられい、其の人鬼が、どうして拙者の魂も肉體も係蹄に掛けやうとしたのか、夫を訊して下されい、」
イヤゴ「何も問ふて呉れるな、お前の知つて居る丈は知つて居るのぢや、俺は

もう一言も言はぬわい、」

ロドヴ「何ぢや祈禱もせぬのか」

グラシ「おのれ、口を引裂いて呉れやう」

オセロ「イヤゴーに」夫が當然ぢや、」

ロドヴ「まだ、御存じて御座るまいから、理解の行くやうに申し述べませう、

こゝに一通の手紙が御座る、之は殺されたロドリゴの懐中より見出された

もので御座る、また、此處にも一通、之れは彼がキヤシオ殿を暗殺す可き由

を認めて居ります、」

オセロ「おゝ悪黨奴！」

キヤシ「残忍非道な！」

ロドヴ「さていま一通は不平たら／＼の手紙、之も亦ロドリゴの懐中より出

でたるもの、之は多分イヤゴーに送らう爲に書いたもので御座らう、なれど

其以前にイヤゴーが參つて用を足したものと思はれます、」

オセロ「おゝ悲道な奴め——キヤシオ汝は何うしてあの手巾を、……妻の半

巾を手に入れたのぢや、」

キヤシ「自分の室で拾ひました、遂今し方イヤゴーの白状する處によれば、此

奴め、自分の望を遂げやう爲にそれを落して置いたとのこと、」

オセロ「おゝ、痴愚者奴が！痴愚者めが！」

キヤシ「尙ロドリゴの書面には、イヤゴーを責めた文句が御座ります、其

に依ればイヤゴーは、夜詰の晩にロドリゴを教唆して、拙者に失策をさせ

遂に拙者は御期氣を蒙りました。先程息を吹き返しましたロドリゴが、イ

ヤゴーに害せられ、また教唆かされたことを申し立てました、」

ロドヴ、（オセロに）「貴殿は此室を出て拙者と御同行をなされねばなりません、

貴殿の職權は御取上られて、キヤシオが此サイプラスを統治するで御座らう

「また、此悪黨奴は——長く苦痛をさする工夫でもあらば、其様な勝刑に處するとしやう——(オセロに)貴殿は囚人とならねばなるまい、貴殿の罪の次第をベニスに申し達するまでは——」

オセロ「暫く御待ち下されい、一言二言、申述べたい事が御座る、拙者が國家に多少の功勞を立てました事は、當路の方々も御承知の筈、いや、夫はもう申すまい、若し貴殿が此度の不連なる所行を本國に御報告になる際には何卒少しも庇ふことなくまた、少し誣ふことなく、有のまゝを御傳へ下され、オセロは、分別こそ足らなれども、妻を深く愛し、又、容易う嫉むなどのことはなかりしかど、欺かれて心狂ひ、彼の暖しい印度人の如く、自分の全種族よりも尊とい眞珠を投げうつて了ふたと御傳へ下され、ついぞ泣いた事もない眼から、アラビヤの、ゴムの樹のやうに、ゴム汁をたらしたとお傳へ下されい、——さてその通りにお書きを願うたならば、次には、此や

うにお書き下されい、以前アレツポイーで、頭巾を被つたトルコ人が、ヴェニス人を打擲した上、我國を謗つたときに、拙者が、其奴めの、喉頭を搦んで、……此の様に突き刺したとお傳へ下されい——

爾う言つてオセロは、我れと我が短劍にて、胸元を突き刺す。

ロドヴ「やゝ！無慘な始末」

グラシ「驟し合せて置いた事も無駄となりました」

息も絶えたるオセロは、眠むるが如く息たえたるデズデモーナの死骸に打ち向かひ、

オセロ「デズデモーナ！其方の死ぬる前に、俺は其方に接吻した、——恠うするより外はないのぢや、接吻しながら自殺するのぢや——」

オセロは死したる妻の死骸の上に突つ伏したる儘、息は絶えて了ふ。キヤシ「斯やうなことを、初めから心配して居りましたが、武器を持つて居ら

れやうとは思ひも奇らなんだ、——と云ふのは、人格の高い人ぢやからだ」
 ロドヴ(イヤゴーに向ひ)「あゝ苦痛よりも、飢よりも、海よりも怖ろしいスパ
 ルタ犬め、此の床の悲惨な荷物を見よ！それも皆んな其方の仕たことぢや日
 もあてられぬ様ぢや！蓋ふて隠して——へ、——グラシヤノ殿、貴殿は此の家
 に留まつて、ムーア殿の家財をお收めあれ、これは貴殿の相續なさるべきも
 のぢや、——さて、總督殿には、此の悪者の裁判をお托し申す、刑も所も拷
 問の法も御自由で御座ります、吾々はこれより直様、乗船し、此の悲惨な
 伍一什を本國へ傳へるで御座らう」

斯くして衆皇を身一つに擔つて居た名將オセローが、哀れ無惨な最期を目撃し
 た人々はいづれも恐怖と哀悼の念を禁める事が出来なかつた。
 實にオセローは、高潔な性格を持ち、妻を愛するの念慮が、溜るゝ計りであ
 ったから、イヤゴーの如き悪漢の奸計に陥りて、かゝる悲惨な最期を遂げ、そ
 の眞心は遂に身に仇となつたのである。かれの情熱は、賢なりと云ふことは出
 來ぬなれど、實に、度に過る程濃厚なものであつた。
 それ故、自分の行ひを非道と知るや、常日頃の、勇猛な心にも似げなく、譏諷
 汗の滴るやうな涙を流して泣いたのである、されど、此の高潔なる最期あつた
 が故に、オセローが生前の勤勇と勇氣とは永久へに世に傳はつた。

オセロー (終)

ポオラ

一名「後のタンカレイ夫人」

ピネロ 原作

杉本繁夫 纂譯

發端

今年四十三歳になるオウブレイ・タンカレイは、今より二十年前に十八歳にな
るヘリオット嬢と結婚した。

ヘリオットは、美人ではあつたが、大理石の腕に黒天鵝絨を巻き付たやうな
情熱のない女であつた。勿論結婚さへ仕て了へば、ヘリオットの恹々冷淡な性

情も幾分は利らげる事も出来るだらうとオウブレイは思つて居た、けれどもそれは全くオウブレイの誤りでヘリオット嬢の冷淡な態度は結婚後と雖も毫しも變らなかつた。

新婚後の兩個は間もなくハイヤグウム(ロンドン州)の新居に移つた、ヘリオットは此處でエリインと云ふ女の兒を産み落したが、嬰兒が出来て後も、ヘリオットの性質は依然として變らなかつた、そして女の子供は間もなくアルマロレトオ寺院に預けられた。

所が、其の後不圖した病でヘリオット夫人が病死したので、爾來二十年の間オウブレイは寂しい孤獨の生涯を送つて來た。

オウブレイは獨り娘のエリインこそ、其母と違つて情愛のある女であらうと思つて居たに、今年十九になるエリインは、宛然母の魂でも乗移つたかと思はれるほど、冷淡な女であつた。恚うなつて見ると、オウブレイは、自分一人が

世界中で唯一人の孤獨者であるやうな感じがしたのである。

オウブレイのやうな恚んな人は、當然何處かに愛を注ぐべき人を發見しないでは居られない、かくして、オウブレイは、シアマン夫人と云はれて居た不幸なボオラに自分の愛情を注ぐべき標的を見つけ出したのである。

けれども、彼れ等の結婚は、果して幸福を兩個に持ち來たしたであらうか。

第一幕

「 一 」

此處は倫敦ピカデリー街に程近いオルバニイに於るタンカレイの住居である。

タンカレイは、二十年前の舊友であつた醫學博士のゴルドン・ゼインと、宮中顧問官で、且つ代議士であるフランク・ミスキスを呼んで、晩餐の饗應をした後で、今度自分が或婦人と結婚すると云ふ話をして、さて言葉を次ぎ、

「結婚すると、兎角友人間の間柄が疎遠になるものだが、或は諸君とも那樣になるかも知れない」

と云へば、友人達は「爾う云ふ事だけは避けやうぢやないか」と言ふ。

其處へ、オウブレイの舊友ケレエ・ドウランムルが案内されてやつて来る、

此處で三人は、最近に、素性の卑いマアベルと云ふ女と結婚した准男爵のオ

ブレイドの話なぞして、不吊合の結婚に就て種々に批評を加へた後、ゼインと

ミスキスの兩人は暇をつけて歸て行く。

オウブレイは後に残つたドウランムルに向ひ、

「今度、僕の結婚しやうと云ふ婦人は、……ジャーマン夫人（ポオラ）として

知られて居る女だ」と云へばドウランムルは思はず驚嘆して、

「君、それは真面目かね」と問ふ。

「勿論さ、君は是だけの事を僕に白状したのだから、君も隠立をするのは

止し給へ、君は彼女を知つて居るだらう」

オウブレイに問れたドウランムルは、此婦人の素性に就てよく知て居た、現

に彼はジャーマン氏の死る前にマルセイユで一緒に遊山船に乗たこともあるし、

又その以前にダアトリー夫人と云れて居た時の事も知つて居る、兎に角、オウ

ブレイが斯る彼女と結婚しやうと言ひ出した事は、ドウランムルに取つては、

實に意外の事であつたのだ。

けれども、オウブレイが、此のポオラとの結婚を思ひ立つたに就ては、多少

感すべき俠氣が交つて居たのである。

オウブレイは、ポオラに溫和な、正しい愛情を持つて居た、彼はポオラが、

是迄によくして呉れた人に一人も出遇さなかつたことを哀れに思つた。彼れは自分が眞の愛情を以つて女に對したならば、那樣な悲惨な生活をして來た女とでも、一緒に立派な幸福な生活を營むことが出來ると思つた。兩個が話して居る所へ、下男のモルスが入つて來て、シアマン夫人がお見えになつたと言ふ、ドウランムルは、勿々に暇を告げて出て行く。

「二」

ドウランムルの出て行つた後を見送つたオウブレイは、奥の方の戸を開けて、『ポオラ！ポオラ！』と呼ぶ。

やがてポオラは入つて來て、嬉し相に男の首に抱きつく、彼女は二十七位の美しい、生々とした、無邪氣な顔の女である、美な見る眼も眩い、夜會服を着

けて居る。

ポオラ『貴方！』

オウブレイ『何故お前は來たのだ』

ポオラ『怒つて在つしやるの』

オウブレイ『ウム——何、だけどもう十一時ぢやないか』

ポオラ（笑ひながら）『知つて居ますわ』

オウブレイ『モウルスが何と思ふか知れやしない？』

ポオラ『貴方は下僕もどんな事を思ふかとそれを氣にして在しやるんですか』

オウブレイ『さうさ』

ポオラ『貴方は馬鹿れえ、あんなものは人に使はれたり、離婚裁判所の證人になりたつする機械ぢやありませんか（四邊を振り向き）まあ、楽しさうな晩餐會ですことれ』

オウブレイ「男の客が三人居たんだ」

ボオラ（疑ふやうに）「男の方ですか？」

オウブレイ「男だよ」

ボオラ（悔むやうに）「まあ、さう！（卓の前に坐し）妾、お腹がすいちやつたわ」

オウブレイ「何か、小鳥のバイか、でなきや何か——」

ボオラ「いえ、く、これが欲しいの、まあ何んて奇麗の菓物でせう、妾、菓物は値の高い中が好なのよ（オウブレイは机の上の場所を明け女の前に皿を置き菓物を取つてやる）貴方、妾、夕御飯を食べなかつたのよ」

オウブレイ「可哀さうに、どうしてさ」

ボオラ「第一妾は、御飯を言付けるのを忘れて居たの、それから妾を嫌つて居たコツクが暇を取る前に復讐をしやうと思つて居たからですわ」

オウブレイ「音生！」

ボオラ「妾もさう言はうと——」

オウブレイ「コラ、お前はそんなことを言つちやいけない」

ボオラ「妾も女中にさう言つてやれと言つたの、貴方は妾がそんなに言つたと

お思ひでしたの、随分ね」

オウブレイ「ウム、悪るかつた、お前お腹がペコ／＼になつたらう」

ボオラ（菓物を食べながら）「いゝえ何ともなかつたわ、それに食べるものが何もなかつたのですもの、妾、一番いゝ上衣を着て食堂のストーアの金庫に足をかけて居る間に夢を見ましたわ、それはく、ほんといゝ晩餐會のことを夢に見たのよ」

オウブレイ「可哀さうに、淋しかつたらう」

ボオラ「それは、ほんとうに立派な晩餐會でしたわ、長い／＼テーブルの端に、

貴方と妾がさし向ひで坐つて居るの、そして盛花の上から時々そつと顔を見
交はしますの、二人が主人役なのよ、結婚してから五年ばかり経つてからな
の」

オウブレイ「女の手に接吻しながら」「五年！」

ボオラ「それから妾達の兩側に、立派なお客様が列んで在らつしやる、それは
貴方、外で眞似も出来ないやうなお客様許りのの」

オウブレイ「ウム、ウム、もつと菓物をお上り」

ボオラ「ですけれども、夢の中の一番いゝ所はまだお話し仕ないわ」

オウブレイ「ちや話して御覽」

ボオラ「それで妾達結婚してまだ幾年にもならないのですけれど、妾は其處に
居るお客さんが、美しい主婦のことに付いて少しも妙な話を聞かかったやう
な顔をしてるのがよく分りました」

オウブレイ「さうなるに違ひないよ、世間は直きに變るかられ、さうなつて了
ふよ」

ボオラ「一寸顔を擧めて」「さあどうでせうか（一寸火を見て）いやだ、もつと
おくべなさいよ」

オウブレイ「火を直しながら」「ウム、だがお前長く此處に居ちやいけないよ」

ボオラ「随分ねえ！ 妾、貴方にお話ししなきやならないことがあるのよ、い
え、そこに居て頂戴（傍を向き顔を横に向けたまゝ）妾、目を覺ました後
で、二階へ駆け上がった貴方に手紙を書いたんですわ」

オウブレイ「なんだ、赤ん坊だね」

ボオラ「そこに在つしやいよ、（衣囊から手紙を取り出して）手紙はこれなの、
妾の今迄のことが皆書いてあるの、そら貴方が御存じの、あれ以來妾のした
事がすつかり書いてあるの、（手で手紙の重みを計りながら）六錢なら行くで

せうか、大抵のことは貴方知つて在らつしやるでせう、これまで随分お話し
しましたから』

オウブレイ『よして呉れ、ポオラ』

ポオラ『妾から御聞きにならなかつたことは外の方からお聞きになつたでせう、
ただと貴方の御聞き洩ちになつたことでもあれば——情人達のことば——
皆此處に書いてありますわ』

オウブレイ『何んだつてお前は今夜に限つてそんなことを言ふんだね』

ポオラ『恚うして置けば、後で争ひが起らないでせう、はい、ではさし上げま
す』

オウブレイ『いや、要らない、要らない』

ポオラ『取つて下さいまし、妾の歸つた後で讀んで下さいまし、そしてもう一
度讀み直して下さいまし、それでお終ひに、ようく考へて下さいまし、で、

若し、間際でも貴方が結婚しちやいけないとお感付きましたらポイント町へ使
をよこして下さい、明日の十二時迄ならばいつでも居りますから——それで
妾は諦めませう』

オウブレイ『何だ、お前は僕をそんな男だと思つて居るのか』

ポオラ『其處ですわ、妾が貴方をほんとうにいゝ方だと思つて居りますから、妾
と結婚したのを後悔なさらないやうにして上げ度いの』

オウブレイ『聲を立て、傍を向き』あゝ』

ポオラ『暫くの間(の後)』妾貴方が氣を悪くなすつたことだと思ひます、けれど
も、これ丈は申さずには居られません』女は態と氣のない、だるいやうな風
をして座る、男は女の方を向き進みよつて傍に跪まづく』

オウブレイ『ポオラ、ポオラ、お前にはまだ私の心が分らないのか、僕はもう
濟んだことをお前から聞のは堪まらないのだ、私も忘れて了ふからお前も忘

れて了つて呉れ、ねえ、さうやって御覽、若しお互が忘れるやうに誓つたら幸福になるに違ひないんだ、つまり、恠んなことは機械的なことで、若し厭な考へが頭に入つたら其時、外の善い事を考へたら可い、恠んなことは意地次第でどうでもなるんだ、僕は此手紙を燃やして了ふから、ね、さうさしてお呉れ、さうさしてお呉れ

ポオラ「其處に書いてあることは別に貴方にとつて新らしいことではありませんから、可いやうになさいまし」

(男はストーブの傍に行き手紙を焼く)

オウブレイ「これでもうお了ひだ、(女の傍に歸り) 何うしたのだ」

ポオラ「立上つて冷淡に」「いえ、なにね、妾が手を切つて進ませうと言つたら、貴方は、「お前は氣の大きな女だ」とか、「有難う」位は被仰ても可ぢやありませんか」

オウブレイ「うん、その事か」

ポオラ「でも妾を取つては、あれだけ言ふのは容易な事ぢやないのですから——」

オウブレイ「だけど豈がお前は——」

ポオラ「だけど、若し貴下が他の方と御馴染になるやうな事があつたら、お別れする時に、何うしやうと考へて置きましたの」

オウブレイ「別れる時に何うしやうと云ふのだ」

ポオラ「妾、自殺する許りだわ」

オウブレイ「又那樣馬鹿なことを——」

ポオラ「ホ、ホ、吃驚なすつたでせう、——もう随分遅いでせうねえ」

ポオラが奥へ外套を取に行つた後で、オウブレイは、不圖棚の上に載つて居

一通の手紙を見る、それは娘のエイリンから来た手紙であつた。

エイリンはもう近い間に宣誓して本統に尼生涯に入つて了ふつもりであつたが、急に氣が變つて、父の傍へ歸て行くと云ふ手紙を送つて来たのである、オウブレイは、それを見て茫然として夢見る如く立つて居ると、其處へポオラが奥の外套を着て歸て来る。

「ねえ、階下の馬車まで送つて頂戴ね」

「憚う言ひがなら、男の腕にからみ附き、

『随分いぢめるわれ、——明日よ、あゝ嬉しい』

二人は一緒に階下へ下りて行く。

* * * * *

第二幕

「—」

整年の春兩個はサレイ洲ウイロミアの近傍ハイヤクムに家を持つた、此處はタンカレイに取つては、初婚の思ひ出深い土地である。

此處に彼は、久しく蘇格蘭の尼院に入れて置いた娘のエイリンを迎へて、ポオラと三人で、家庭を營んで居る。

けれども、不幸にして一家の中は、彼等が初めに豫想した程、幸福なものではなかつた。

今しもオウブレイとポオラは朝飯の卓に向つて居たが、オウブレイは黙つて

て紙を讀んで居る。

下男と下女とが皿を配つて退いて行くと、オウブレイは手紙を側に置いて、彼方の窓を眺めながら、

オウブレイ『あゝ日が照つて居る！ 春だなあ』

ボオラ（柱時計を見て）『丁度六分だわ』

オウブレイ『六分だつて？』

ボオラ『えゝ、六分です、貴方が何か仰しやつてから六分ですわ』

オウブレイ『勘辨してお呉れ、僕は手紙を讀んで居たんだから、お前は今朝エリインを見たか』

ボオラ（冷ややかに）『えゝ、貴方が前の前に仰つた事もエリインの事でしたわ』

オウブレイ『だつてお前、何も話すことがないぢやないか』

ボオラ『エリインは二時間前に朝御飯を食べて犬を伴れて散歩に参りましたさうです、モルガンがさう申して居りました』

オウブレイ『衣服をドツサリ着て居つて呉れ、げい、此陽氣は當にならなかられ』

ボオラ『妾、昨夜御飯のあとで朱紗の靴で芝生を走りまはりましたが、貴方は妾のことを心配して下さいますか？』

オウブレイ『したとも』

ボオラ（氣が折れたやうに）『ほんとですつ』

オウブレイ『お前は僕に心配掛けて困るよ、お前は無茶なこととしては喜んで居るのだからほんとうに仕方がない』

ボオラ『ほんとうに妾、お轉變れ、（男の側に行きて接吻し、側にある手紙を見る）クイレイさんからのお手紙ですか』

オウブレイ「あの男は遂に此の近所に居るんだよ、あの何——と此近所に」
ポオラ「あの窓からいつも煙突を見させて頂いて居るあの家の奥さんと御一緒にですか」

オウブレイ「さうだ、コオテリオン夫人と一緒に」

ポオラ「コオテリオン夫人ですつて！ あの方は、妾達が此の土地に落着いたら、まづ第一に訪問して、外の人にお手本を示して下さつても可い筈なのに……、コオテリオン夫人もあるものですか——」

オウブレイ「お前そんな亂暴なことを言ふもんじゃないよ」

ポオラ「自分の席に復し」え、あの方は貴方の古いお馴染みなんですか、そして前の奥さんともお知合ひなんですか、あの人が皆と一緒に妾を虐めやうなんて随分だわれ、でも妾敵をとつてやるわ——あの方、もう四十六でせう、女としてそれ丈年をとれば復讐はそれで澤山だわ」

オウブレイ「だが、ケイレエ君の手紙では、あの人は都の方へ行んださうだ、で暇乞にあの男も今朝お前を訪れて来るよ、僕達はこつちへ来るやうに言つて見やうぢやないか、うん」とお言ひ」

ポオラ「え、」

オウブレイ「喜んで」あ、あ、随分古い馴染のケイレエ君だな」

ポオラ「冷淡に」あの方は貴方には面白いでせうよ」

オウブレイ「お前にだつてさうぢやないか」

ポオラ「貴方にお友達が出来たからつて、妾までが大騒ぎをして喜ぶ譯はないぢやありませんか」

オウブレイ「まあ、いゝよ、あの男は倫敦の話をするよ、お前はそんな話が好きぢやないか」

ポオラ「倫敦ですつて、倫敦と天とどちらが遠いでせう」

オウブレイ『これ、何を言ってるんだ』

ボオラ『あ、妾、厭になつて了つた、貴方！』

オウブレイ（手紙を一つに纏めて、女の方に近づき、肩に憑り）『赤らやんや、ちやどうしたらいいと言ふのだよ』

ボオラ『さあ、何うも仕やうはありませんわ、貴方は出来る丈の事を妾に任せて下さつたんですもの』

オウブレイ『それは何ういふ譯だね』

ボオラ『貴方は妾と結婚して下さつたでせう』

（男は物思ひに沈みつゝ、女を離れて卓の方へ行く、手紙をテーブルの上に置きし時フト吸取紙の上に置いてある一通の手紙（上書を書き、切手まで貼つてある）を見る、彼はそれを取り上げて）

オウブレイ（聲の調子を變へて）『お前は今朝御飯前に手紙を書いて居たね』

ボオラ（急いで男の方を向き、再び側を向ひて）『えゝ、その手紙を書いて居ました』

オウブレイ（手に手紙を持つたまゝ）『オウレイド夫人に出すんだね、何うしたのだ』

ボオラ『何故出しちやいけないの？ マーベルは妾の古い友達だわ』

オウブレイ『お前は文通して居たのね』

ボオラ『昨日便りがあつたのよ、兩人でリベラから歸つたのださうです、何んだか仕合せさうですわ』

オウブレイ（嘲笑的に）『それはまあいゝこつた』

ボオラ『どうして貴方は、マーベルの事とさへ言へばそんなに變なんでせう、あの娘は氣のいゝ娘なのよ、前とは凡てに違つて居ますわ、髪を染めることさへ止めやうと思つてるんですもの、それにオウレイド夫人となつてゾヨオ』

「ッさんと結婚してゐるんですもの、あの子が處何が悪いんでせう」
オウブレイ（側を向いて）「あゝ！」

ボオラ「貴方はそんな風にものを仰しやるもんだから、妾をむしやくいやさせますわ、ほんとうに貴方がそんなに仰しやるならばあの娘だつて妾だつて毫つとも變りはないぢやありませんか（男は急に女の方に向く）妾、これ丈は餘計なことだつたかも知れませんが——」

オウブレイ「さうだ全く餘計なことだ（男は机の上に手紙を投げ出して、新聞を取り上げる）」

ボオラ「濟みませんでしたわね」

オウブレイ「いゝさ、まあいゝよ」

ボオラ（手紙を弄びながら）「妾——妾書いたことを言つて了ふはうがいゝかも知れませんが、無論その積りでは居たのですけれど、妾——妾、あのオウレ

イド夫婦に此處へ来て逗留して呉れるやうに言つてやつたんですわ（男は女を見て落膽したるが如く床の上に新聞を落す）「デヨーザさんはケイレイさんと仲がいゝんですもの、こゝで兩人お逢になつたら、お喜びになるでせう」

オウブレイ（薄笑ひしつゝ）「へゝゝゝ！ オウレ——は晩酌を随分飲るさうだよ、冗談ぢやない！」

ボオラ「ほんとうに妾、我慢がし切れないんですわ、了ひには死んで了ひますよ（女は机の上の花瓶より、花を選びだして、それを揃へて軸を切り、具合よく上衣の胸に着ける）妾達の毎日の暮と言つたらまあ何と言ふんでせう、

朝は馬丁を伴れて馬車で村へ買物に行くし、お晝は貴方とエリイン、午後は小説と新聞、お天気ならばもう一度馬車で出掛ます——お天気ならばですよ、お茶の時は貴方とエリイン、それから二時間たつて晩の御飯に貴女とエリイン、それからヘシツク（如き遊び）ベシツクの勝負には貴下と妾、其間エリイン

は隅の方で、宗教の本を讀んで居ります、それから妾があくびをする貴方があくびをする、エリインが吐息をする、三人が不意に立ち上つて「お休みなさい、お休みなさい、お休みなさい」(接吻の眞似をしながら)「ゆつくりお休みなさい、あつまらない」

オウブレイ「さうだ、ポオラ、だが今はさうだが、其中に漸次と人が来るやうになれば——」

ポオラ「ええ、それが元來諷の因なんで御座いますわ、(窓を指さしながら)貴下は彼様な人が此方へ來ると思つて在つしやるんですか——、妾は那樣氣休めには乗りませんよ、妾達は何時まで此處におとなしく住ひ續けて、終には、體から生氣も抜けた、無益ない體面と云ふことのために、枯れ萎びた人間になつて了ふのですわ、何故妾達は、あの珈琲店通りに居たやうな、無頓着な生活をした方が、すつと幸福であつたと云ふ事に氣が付かなかつたん

でせうか——そりや妾だつて、結婚して、歴とした夫人になり度いとは思つて居ましたが、恁んなに、歴乎とした旦那様のある婦人方の間に入つて見れば、何も自分が、歴とした夫人だからつと言つて、それが、少しも妾の自慢になる譯ではないぢやありませんか、……ねえ、貴下……(オウブレイは兩の手で、頭を抱へてうち洗んで居る)ねえ、貴下、貴下は泣いて在つしやるんぢやありませんまいねえ」

(オウブレイは上氣した顔をして上を見あげた、其處へエリインが、散歩の軽い装で入つて來る、彼は、聲の低い、眞面目な少女で、顔は稍聖母に似通つて居る、ポオラに對する態度は、極冷淡で、餘所餘所しい)

オウブレイ(低い聲で)「エリインが」

エリイン「お早う御座いますお父さん、お早う御座います、ポオラさん」(ポオラはエリインを抱きて接吻す、エリインは少しも應ぜぬ)

ボオラ「お早う（快活に）妾達は日の當つてる此方側で御飯を食べて居たのよ」
（ボオラはピアノに向ひ、陽氣なる旋律を奏する、ボオラの後ろ向きたるを見て、エリインはオウブレイの所へ行き接吻する、オウブレイはひそかに接吻を反す、兩人の離れたる時下男再び入り來り朝飯の食卓を外へ出しにかゝる）

オウブレイ（エリインに）「私はお前か何處に行つて居たか分るよ、お前の上着にはゴースがくつつ付いて居るから」

エリイン（裾からゴースの針を取り除きつゝ）「妾ロバーと一緒に黒沼の近くまで行つたのよ、ロバーは足の裏に棘を刺したのですわ、妾二階へ毛拔を取りに行つて來ます」

オウブレイ「エリイン！（父の方に歸る）ボオラは少し憎氣で居るんだよ、友達がないと言つてこぼしてゐるんだ」

エリイン「妾一日中ボオラさんと一緒に居ますわ、お父さん」

オウブレイ「だけとお前はおとなしい子だらう、處がボオラは自分のまはりに陽氣な人達の居るのが好きなんだよ」

エリイン「妾、もともと無口なんですわ、ですから、自分の性に合はないやうにするのは困るのよ」

オウブレイ「私もさうして呉れとお前に言ふのではない」

エリイン「妾、今朝ボオラさんと一緒に村の方へ行かうと言つて見ませうか、ねえ？」

オウブレイ（優しく手を握り）「ウム、有り難う、さうしてお呉れ」

エリイン「では妾ロバーを見てやつてから迎へに參りますわ、（エリイン出て行く、ボオラはピアノの演奏を止めて腰掛けにかけたるまゝオウブレイの方を振り向き）

ポオラ『もう貴方とエリインさんの内證のお話は済みまして』
オウブレイ『内證話？』

ポオラ『貴方は妾があれを何とも感じて居ないと思つて入らつしやるの、――
肩が痛むやうに辛く思つて居るのに』

オウブレイ『エリインは、直ぐ歸つて来てお前と一緒に居るんだよ、(女の
上へに俯向き)ポオラお前それで僕に約束が守れると言ふのか』

ポオラ『あゝ厭だ(自烈つたさうに立ち上り足早に長椅子の方に行き、落ち着
かざる如く、身を揺ぶりながら坐す)妾約束は守れませんわ、妬けるんです
もの、我慢が出来ませんわ、妾は貴方があの子を眺めたり、見つめたりして
在るのがよく分ります、何か仰る時には聲を低くなさるぢやありません
か、妾、貴方があの子をどんなに可愛がつて在しやるのかよく分つて居ます
わ』

オウブレイ『ぢや何うしたらいと云ふんだあの子には外に家は無いぢやない
か、あの子は僕の娘だもの』

ポオラ『いえ、貴方の神様ですわ、神様のエリインですわ』
オウブレイ『お前だつてあの子をとなしい良い子だと言て幾度も僕に話した
ぢやないか』

ポオラ『えゝ良い子です、けれどもそれで妾が妬けないと思つて在らつしやる
んですか(男の側に行き、男の腕に縋り付き)貴方、世間には感情と言ふも
のは二種ありますのよ、貴方が尊敬して在つしやる女への愛情と、貴方が貴
方の愛する女への愛情と二種ですわ、あの子は貴方からその尊敬される方の
愛情を受けて居ますけれども、妾は受けて居ませんのよ』

オウブレイ『シツ、く、お前は無法な事を言ふから困るよ』
ポオラ『若しエリインが少しでも妾のことを思つて呉れましたらこんなぢやあ

りませんの、そしたら妾、妬くなんてことはしませんわ、何うしてあの子は妾のことを思つて呉れないんでせう』

オウブレイ『あの子——あの子——あの子だつてその中にはさうなるよ』

ボオラ『それ御覽なさい、吃らないでは言へないぢやありませんか』

オウブレイ『あの子は少し冷淡なやうに思はれる、いろんな所が母親に似て居る、僕は毎日それに氣が付いて来る』

ボオラ『彼の娘は大理石のやうですわ、あれぢや困りますわ、何とも難解の餘地がないぢやありませんか、あの娘は何う思つて居るか知れませんが、妾だつて、あの娘同様に、清淨な體ですわ、——唯妾には夫があるだけの違ひですわ、……ねえ貴下、妾も、あの娘に好かれるやうにして、手傳つて下さいまし』

オウブレイ『加勢して呉れと言ふのか』

ボオラ『貴方ならば出来ることですわ、貴方からあの子に妾を愛するのは義務だと云ふことを教へてやつて下さいまし、あの子は貴方の仰しやることなら何んでも聞くのですわ、ねえ貴方、いゝ女が妾を自分のやうに思つて愛して下さいますならば、妾はどんなによくなるか知れませんが、妾ばかりではありません、貴方もそれで利益をお受になるのです、さうすれば、妾も落着いて今迄のやうにひどくそばくすることもありません、さうしたならば、恠んなひがんだ考へも妾の心から取れて了ふでせう(甘へるやうに)ねえ貴方—』

オウブレイ『まあ、お待ちよ、今に、何事もよくなつて来るから』

ボオラ『え、それは貴方さへ妾に加勢して下されば、なりまするわ』

オウブレイ『それまでの間、お前はあのオウレイド夫人に當てた手紙を出さないで引裂いて了つて呉れないかれ』

ポオラ『男の手に接吻しつゝ』『えゝ何でもしますわ』

オウブレイ『ウム有難う（笑ひ乍ら）ハ！ハ！冗談ぢやない。考へても御覽よエロマンの神様とあの女を並べて置くなんて』

ポオラ（叫びつゝ彼方に行きながら）『まあ！』

オウブレイ『何うしたと言ふのだ』

ポオラ（狂熱的に）『貴方はエリインの事ばかり考へて、妾のことは少しも思つては下さらないぢやありませんか、貴下はエリインの事ばかり考へて在つしやる、エリインのことばかり！』（エリイン入り来る）

エリイン『ポオラさん、貴女は妾をお呼びなすつて、（兩手を握りながら、オウブレイは側を向ひて出て行く）お父様は怒つて在らつしやるんですか』

ポオラ『時々妾があの方を狂人のやうにさして了ふのよ、そら妾、白狀して了つたわ』

エリイン『さう？ 何うしてそんなになさるんですの』

ポオラ『だつて妾——妾妬けるんですもの』

エリイン『妬けるんですつて？』

ポオラ『さうなの、お前さんにさ、（エリイン黙す）でお前さんそれを何う思つて居るの』

エリイン『妾知つて居ますわ、分つてゝよ、妾それでほんとうに厭な氣持なの、貴女は妾に何うせいと仰しやるの、出て行けと仰しやるんですか』

ポオラ『出て行けなんて！（首を動かしてエリインを招き乍ら）ねえ！（エリインは靜に且つ冷やかにポオラの側に寄り）お前さんなら容易なく妾の妬げゝのを癒すことが出来るのよ、何故お前さん、妾を好いては呉れないの』

エリイン『貴女を好くつて、何んなことなんですの妾には分りませんわ』

ポオラ『妾を愛することなのよ』

エリイン「愛と云ふものは、自分の考へ一つで何うにでもする事の出来るやうなものぢやありませんわ、多分妾も其間に變るでせうよ、二三ヶ月前までは、爾父さんでさへ愛しては居ませんでしたわ、——ですけれど阿母さんの被仰る事を聞たんですわ」

ボオラ「爾う驚う、貴女は夢に種々な事を御覺になるのね——、眠つて居る時に、阿母さんが、貴女に何か仰やると思つて在つしやるのれえ」

エリイン「阿母さんの亡い方に取つては、阿母さんは此世だけに死んで居て、彼の世から兒供を見護つて在つしやると思ふのが、せめてもの心遣りですわ、妾も阿母さんの事に就ては爾う信じて居るのですわ」

ボオラ「それで、貴女は妾を愛するやうに言いつけられなかつたの」

エリイン「暫時の間の後、殆ど聞えないやうに」

ボオラ「エリインさん、貴女は何故妾を、二度目の阿母さんと思ふやうに仕て

は下さいませんの、そればれ、無論、貴女と妾は、それ程齡も違つては居りませんが、だけど妾、経験から言へば、貴女よりはすつと齡を老て居るのです。妾は兒供は持ちません。それは妾もよく知つて居ります、ですから、若し兩個で、互に親子であるやうに仕て下されば、妾だつて、甚麽に嬉しいか知れませんわ、爾うして下さいませんの、……貴女、妾をお可笑な女だと思つて在しやるかも知れないけれど、……妾の性質には二通りあつてね、一つの方は他一つの方を消して居るのよ、二三年前に妾は或る苦勞をして、それから以來と云ふものは、涙一滴滾さなくなつたの。だけれど、若し貴女がたつた一度でも妾を抱いてお呉れでしたら、妾二階へあがつて、思ふ存分泣くでせう、——妾、恁んな事は、今迄女の方に話した事なぞはなかつたの、ね、エリインさん、恐がらないで、妾に接吻して下さいな」

(殆ど絶望したやうな聲を出して、エリインはポオラを避けながら、両手で顔を掩いながら、腰掛に倒れる)

ポオラ (憤然として) 『まあ、何うしたのですの、失禮な、何うしたと云ふんですの、何う云ふ積りなんですの』(下男入り来る)

下男 『ドウランムル様御入來で御座います』(ケイレエドウランムル乗馬服を着て快活相に入り来る)

ポオラ (氣を取り直して) 『まあ、ケイレエさん!』

ドウランムル (親しげに女と握手し) 『御機嫌は如何ですか (客を見て立ち上がる) エリインと握手しながら) 私は一時間程前に遠方の方で貴女をお見かけ申しました、ステイツプルトンさんの近くのゴースの藪の中で』

エリイン 『妾は氣が付きませんでしたドウランムルさん』

ドウランムル 『エリインさん、私の経験によれば十九の若い婦人には、四十五の男は何等の注意を引かないと見えませぬ、(笑ひながら) ハハハ』

エリイン (戸の方に行き) 『ポオラさんお父さんは今朝貴女と一緒に村の方に行くやうにと仰しやられたんですが、連れて行つて下さいますでせうか』

ポオラ (冷淡に) 『是非どうぞ、それからワツツに三人乗れるやうに仕度してお置きと言つて頂戴』(エリイン出て行く)

ドウランムル 『御主人は如何ですか』

ポオラ 『え、エリインの家に居る時は大變いゝんですよ』

ドウランムル 『貴女は如何ですか、聞くまでもないでせうか』

ポオラ (窓の方に行き) 『犬の様な暮しをして居るんです、妾のは、クレイレエさん』

ドウランムル 『え?』

ポオラ 『幸福な結婚だなんて言ふものは、皆そんなものぢやありませんか、』

身奇麗にして、美味しいものを喰べて、よく氣を付けてもらつて居ります、嘔
むやうな骨もないことはありません。新しい寢蓐に不自由することもあり
ません、(凝つと窓の外を見つめ)あゝ厭だ』
ドウランムル『いや、此のお住居は實に結構なお住みです、高臺からの景色
と云つたら素敵ですからね』

ポオラ『え、妾には倫敦が見えます』

ドウランムル『倫敦が！ まさかそんなに遠方は見えますまい』

ポオラ『いゝえ、見えるんですよ、お天氣の日には、地中海も見えます、今朝
のやうな日にはアルジャーヤも見えます、(激したる調子にて)ねえケイレエさ
ん、妾達に向ふに居た時、あのチャーマンさんの快走船に乗つた時の楽しい
時代を思ひ出しはしませんか、(不意に立ち止まりてドンツラムルが女の顔を見
みつけて居るのに氣付き)まあ妾、何をくだらない事を言つたんでせう』

オウブレイ、入り来る

オウブレイ(ドウランムルに向ひ)『やあ、ポオラが君に頼みやしなかつたか』

ポオラ『いゝえまだ』

オウブレイ『君はコオテリオンさんの處を出やうとして居るんだから、今日直
ぐにも僕の方へ来て欲しいのだが、一月許り、いや君のいゝ丈滞在して居て
呉れ給へ、——ねえさうだらうポオラ』

ポオラ『貴女の御幸抱出来る間居て下さいませしケレイエさん』

ドウランムル(オウブレイを見て)『いや有難う、(ポオラに)僕を寄せて下さる
なんて有り難う御座います』

ポオラ『どう致しまして、妾、妾電報を打つて倫敦から魚を取寄せなくちやな
りません、お容様に御馳走を拵へるなんて嬉しいわ、何かすることが出来る
んだわ、何かすることが出来るんだわ』(ポオラは子供らしき喜びの態度にて

出て行く)

ドウランムル (オウブレイを見て) 『どうだね』

オウブレイ (疲れて心配らしき様子で) 『君もどうだ』

ドウランムル 『此頃はどうかだね』

オウブレイ 『僕の境遇は前よりちつとも善くなりやしな、僕は前の週に君に

逢つた時ポオラがエリインに熱烈な嫉妬らしい愛情を持つてると証したらう』

ドウランムル 『ウム、しいし僕は、何とも思つて居ない、だが君はそれをあま

りいゝ方には考へて居なかつたやうだね』

オウブレイ 『エリインが其に應じないんだがね』

ドウランムル 『だけでも、まだ始めだもの、その中だんくエリインさんも君

の奥さんに愛情を持つて来るだらう』

オウブレイ 『だが其處に問題が一つあるんだよ』

ドウランムル 『どんな問題だ、その事で僕は酷く頭を痛めて居る、一體エリインは外の女とは違つて居るんだから、僕はあの子を此世の中に一番純潔な女だと考へてる、で僕は自分で考へるんだが、あの子をあんな陽氣な氣輕なポオラの側に付けて置くのはどうかと思つてる』

ドウランムル 『君、冗談言つちや不可いよ』

ドウランムルの言葉に對してオウブレイは次のやう言つて、ポオラとエリインの事で、自分の心配して居る所を打ち明けた。

オウブレイ 『君、實は僕も娘に向ひ、ポオラにもつと馴々しく仕てやれと言ひ度いんだけど、實際ポオラは曲癖れた考へを持って居るんだから、——と云ふのも彼女の罪ではないんだ、彼女の出入して居た社會が、ポオラを彼那に仕て了つたんだ、で別に深い意味があると云ふ譯ではないんだが、彼の女は時々突飛に變な事を言ひ出す、——恁んな言葉を自分が現在幸福にしてや

らう、満足さしてやらうと思つて居る女の口から聞されることは、實に堪え得られないことだ。實際の所、ホオラは良い女なんだけれど、唯少し性質が捻られて居るんだから、僕はエリインを何うしたら可いだらうかと、心配ばかり仕て居る、——實の所、僕は、あんな尼寺に教育されて居たエリインが、僕の所へやつて来たのを不思議に思ふんだ、寧ろその事、彼女が死んで居て呉れたらばと思ふことも度々あるよ』

オウブレイの此言葉に對して、ドウランムルの言つた所は慙うである。

オウブレイが、娘のエリインを神様のやうに思つて居るのは、誤りである、兎に角、彼の女が、白い着物の裾の方に少しの塵も付けないで行けるなぞと云ふことは全たく不可能のことである。で、此のエリインを處置する方法が二つある、一つは彼女の女を所謂極樂に閉ぢ込めて置くか、でなければ、普通の「肉と血の若い娘」としては、彼の女の屬して居る社會に利益を與へしめるか、二つ

に一つでなければならぬ。

慙う言ふ意味の話をすると、オウブレイは、

『僕も感情を披にして、エリインが、運の好い結婚をして呉れれば、それが、彼女の一身の唯一の解決法だと云ふ事も知つて居る、けれども君は、爾う云ふ徑路の危険と云ふことを少しも念頭に置いては居ないね』

ドウランムル『危険?』

オウブレイ『君——エリインが世間の男や女の中に交れば、遅かれ早かれ、あのホオラの以前の來歴を知らないでは済むまいよ』

ドウランムル『フン、君はあのアラビヤ物語の中に書いてある寶石商の息子の話を覚えて居るかね無論覚えて居やすまい、君のお嬢さんが若し生きて居るならば、それを知らずに済む譯はない、オウブレイは半ば抑へた苦悶の叫びを出す)で若し彼娘が、その話を聞くとすればそれがよく分るやうに世間を

知つて置く方がいゝかられ』

オウブレイ『分るやうに！』

ドウランムル『さうだ、分るやうに——理窟を付けるやうに』

オウブレイ『理窟を付けるやうに！』

ドウランムル『理窟を付けると言ふことは寛大に見ることだ、寛大に見ることから許るすと言ふことまでは唯一歩だかられ』

オウブレイ『なるほど、君の話は尤もだ、君はいつも尤もな話をして呉れる、成程さうだ。だがよしんば僕が、エリインの將來の問題を憊う云ふ具合に解決しやうとしても、僕にはそれを遣り逆す勇氣がないのだ』

ドウランムル『どうして？』

オウブレイ『僕は世間を離れたから、娘を世間に出す方法も無いのだ』

ドウランムル『誰か友達があるだらう、誰か女の友達があるだらう』

オウブレイ『誰も無い皆僕を棄てて行つて了つた』

ドウランムル『そりや間違つてるよ、僕は一人丈知つて——』

オウブレイ『耳を聳だて』『あゝあればポオラの馬車の音だ、何れ此事はまた話をしやう』

ドウランムル『窓の側に行きて外を覗きながら』『あれは二頭立ての馬車ぢやな』

いか『オウブレイの方に向き』君は僕に許して呉れるだらうな』

オウブレイ『何を』

ドウランムル『君は、此處の奇麗な馬車道を誰の車がやつて來てると思つてる』

下男『オウブレイに』『コオテリオン夫人がお出になりました』

オウブレイ『コオテリオン夫人がお出でだつて！(暫くの間)よし／＼(下男退く)一體どうしたと云ふ譯なのだらう』

ドウランムル『僕がコオテリオン夫人の處にお世話になつて居る時はよく君や』

君の家族の話をしたもんだ

オウブレイ「フム、そうか」

ドウランムル「でコオテリオンさんは、もつと早く此方の奥様をお連れした方が、人情だと考へるやうになつたんだ。それで、あの女は、復活祭の間だけ外國へ行つて居て、此の期節だけを倫敦に住むんだそうだ、で、今朝はエリンさんと一緒に居て貰いでいんで、頼みに来たんだらうと思ふ」

オウブレイ「成程……、ケイレエ君、君等は二人で巧く企んだんだね」

ドウランムル「企らんだなんて事があるもんかね、ハ、ハ、ハ」

暫くするとコオテリオン夫人がエリンと共に入て来た。夫人は四十五六の容色の可い、人柄の好さそうな、元氣な婦人である。

此人はオウブレイの最初の夫人と友達であつたのみか、兩人の結婚の時も始終相談に乗つた人で、オウブレイとも可なり親しい間柄であつたが、彼がオ

オラを娶つて以後と言ふものは、餘り行き來を仕なかつた、現にオオラが此のハイヤクムの家に来て、夫人と直ぐ眼と鼻の所に住つて居るにも拘らず、夫人は今日まで一度も訪問を仕なかつたのである。

聽てオオラも二階から降りて来たけれど、初めから快く思つて居ない夫人の事であるから、嫌味たつぷりで夫人に對す、けれども夫人は、それを静と忍んで居る。

やがて、コオテリオン夫人は夫妻に向つて尋ねる、「自分はこれから、一二週間許り巴里に行つて逗留しやうと思ふが、未だ世間と云ふものを餘り見たことのないエリンさんを、御一緒にお連れ申し度いが、お許し下さるでせうか」と。

元來世間を知ぬエリンは、初て爾う云ふ所を見るのであるから、夫人の申出でを聞いて、思はず驚きの叫びを上げる。父のオウブレイも夫人の親切に對

して感謝の意を表して居るけれど、獨りポオラのみは、夫人に對して禮も言はず、却てそれが不満らしい様子である。

けれどもポオラは、初めからエリインが一緒に行くことに同意しまいと思つて居た。そして、エリインの意志を確かめて見ると、エリインは一緒に行き度いと言ふ。ポオラは、それが腹立しくならなかつた。

けれどもポオラ一人の胸の中では、良人のオウブレイが、必ずそれに同意しまいと思つて居たにも拘はらず、愈々オウブレイの意志を確かめて見ると、オウブレイも、エリインの巴里行きに同意なので、ポオラは落膽して了ふ、イヤ、落膽と云ふよりも、ポオラは、彼様な夫人に、エリインを連れて行かれることが、腹立しくつてならなかつたのである。

コオテリオン夫人の立ち去つた後で、ポオラは上衣と帽子を脱いで腰掛の上

に投げ付けて、あゝ口惜しい、口惜しい、口惜しいと叫びながら、倒れるやうに椅子にかける。其處へ夫人を玄關まで送り出して來たオウブレイが部屋へ歸つて來て吃驚する。

オウブレイ『お前は、僕がエリインを夫人と一緒にやることにしたのが、氣に容らないで、怒つて居るのだらう……』

ポオラ『今、言を被仰るんなら、氣をなべて被仰やいよ、妾は恚に腹の立つたことはないんですから……』

恚う言つてポオラは、腹立しげに一通の手紙を認めて、それを下男に持してやる。手紙は、マアベルと言はれたオウブレイ夫人を呼び寄せるためにやつたものである。

此のマアベルと云ふは、ポオラの昔友達で、以前は、珈琲店に出入して、兎角の評判を取つた女である。

オウブレイに取つては、斯る賤しい女を自分の家庭に入れることは如何にも堪へ難い所である、けれども、オウブレイは、ボオラが、
『此の上妾を侮辱して御覧なさい、妾は直ぐと此家を出て行くから、……貴下は、妾の手からエリインを取つてコオテリオン夫人のやうな人に、附けておやりになつたから、妾は自分の得易い所から友達を伴つて來ても、貴下に故障はない筈です』
と言ふので、如何ともすることが出來ない。斯くして兩個は、何時か互いに口も利かないで日を送ることになる。

第三幕

『一』

コオテリオン夫人にエリインを連れて行かれたボオラは、満身の嫉妬と不平から、今は良人オウブレイの意志に背いてまでも、而當がましく自分の昔馴染オウブレイド夫婦を喚び寄せた。

一體此のオウブレイドと云ふは、若い准男爵で、其妻のマアベルは、前記した如く以前ボオラと一緒に珈琲店入りをして居た不評判の女である、恚んな男女を連れて來られて自分の家庭を攪亂されることは、オウブレイに取つては實に忍びない所である。

ワウレイドが来てから後、ポオラとオウブレイの間は妙に疎くなつて、今では口を利くことすら稀である、偶さか他人が居れば、他人前だけは、互いに話を交すこともあるけれど、それも、唯一時の懸念を繕ふに過ぎない。

然しワウレイド夫婦を呼び寄せて、自分の不満を充さうと思つたポオラの考へは、全く空想に過ぎなかつた。面白い友達だと許り思つて居たマアベルは、今では良人の爵位を鼻にかけて、いやに人を蔑むやうになつたし、オウレイドは又、オウレイドで、思つたよりも氣障氣たつぶりの男なので、ポオラは、此二人が傍に居ると、焦慮として業が煮えて堪らないやうな氣持がした。で今はポオラも、二人のものゝ出て行くのを、心待にして居る様子であつた。

さて、一方、パリに行つたコオテリオン夫人とエリインからは、その後度々オウブレイに宛て消息はあつたけれど、ポオラに宛ては一通の手紙も來なければ、唯の一行の消息も書いてなかつた。それを知つたポオラは、何と云ふ理由

もなく、腹立しくつてならなかつたが、或朝、コオテリオン夫人とエリインから來た手紙が、卓の上に乗つて居るのを見たポオラは、ついそれを取つて、密そりと自分の内篋へ入れて置いた。

ポオラは、別にそれを自分で開けて見る氣もなかつただけけれど、ついそれを良人に渡す機会を逸して、やうやうの事で、總てを白してオウブレイに渡した時は、もうエリインとコオテリオン夫人の歸つて來る時分であつた。

コオテリオン夫人は、パリに滞在中、エリインに求婚を申し込んで來たアアテイル大尉と云ふ青年軍人の事をオウブレイに知せて、エリインとの結婚に就いて相談を持ちかけて來ただけけれど、オウブレイは、その手紙をポオラに取られて居たのであるから、何時まで経つても返事はパリの方へ達かなかつた、兩個の女は終にハイヤクムの家へ歸つて來たのである。

* * * * *

オウブレイが何うして手紙を見なかつたのか、深い理由は解らないけれど、
兎に角、兩個にはあの手紙が今まで開封されずに居たことだけは判つた。
で、コオテリオン夫人は、兩個が急に歸つて来た理由を話して、更にアアテ
イル大尉のことを紹介し、
『あの方は明日正式にお宅へ顔を出すやうにと思つて此地へ一緒に入來した
のですわ』と云ふ。
乃で、オウブレイは、コオテリオン夫人を送り旁一緒にウオレンへ行く。

『二』

エリインは父とコオテリオン夫人の後影を見送つて、さて向き直らうとする
時、不圖佛蘭西窓から薔薇が投込れて、エリインの足許へ落た、エリインは怪

しみながら其を拾つて窓の方へ行くと、好男子の、ヒユウ・アアテイル大尉
窓の外側に立つて居る。

エリイン『まあヒユウさんなの』

ヒユウ『ネリちやん』

エリイン『どうなすつたの』

ヒユウ『叱！ なんでもないんだよ、冗談だよ、(笑ひながら)僕はコオテリオン
夫人の原が貴女のお父さんの畑に續いてるのを氣が付いたもんだから生け垣
の隙間を抜けてやつて来たよ』

エリイン『何故入らつしたんですヒユウさん』

ヒユウ『だつてウオレンに居たつて詰らないんだもの、彼處はアマニユウ・ド。
フリーランドとは全然違ふんだから、そんな顔をするもんぢやないよ、實
際僕は貴女の家を一寸見てそれから歸らうと思つたんだよ、すると此處に誰

だか人影が動いてるのが見えたから、貴女を一目見度いと思ふてやつて来たんだ、あれは貴女のお父さんかい(室に入る)

エリイン「え、さうです」

ヒユウ「おかしいぢやないか、僕があの大木な水松の後ろに隠れて居ると兎が足の上を駆けて行つたよ」

エリイン「貴方は早く入らつしやらなくちやいけませんよ、此處へ在らつしてはよくありませんよ」

ヒユウ「だけど、唯笑談にだよ。貴女は何んにでもそんなに生真面目なんだもの、さようならと言つて呉れ給へ」

エリイン「先刻言つたぢやありませんか」

ヒユウ「ウォレンの座敷でコオテリオン夫人や下男の前で言つたんだらう、— 此處は巴里の家とは違ふんだなあ」

エリイン(急はしく男と握手し)「ではさようならヒユウさん」

ヒユウ「それ丈か、それぢや唯の知合と同じぢやないか(男は一寸女を抱く、しかし女は振りほどきて)」

エリイン「貴方がそんなになさると厭になるんですよ(怒つたやうに普徴を投げ付けて)ほんとうに!」

ヒユウ「僕は貴女を怒らしちやつたれ」

エリイン「え」

ヒユウ「許してお呉れよ、ネリちゃん、五分間許り来てお呉れよ、廻迄アラアラ行かうぢやないか」

エリイン「いゝえ、いゝえ、いけません」

ヒユウ「ぢや二分許り、— 許してやると言つて呉れる間丈」

エリイン「許して上げますわ」

ヒユウ「當り前さ、こんなにされちや、夜もおちく寝られやしない、ほんとうに僕は馬鹿だれえ！ 畑まで来てお呉れよ、仲直りをしてお呉れ」
エリイン「誰か室へ来るやうですよ、貴方は此處に居るのを見られ度いんですか。」

ヒユウ「ちや僕はあの水松の後ろに待つて居るから、貴女は何とか言つてお呉れよ、ネリちゃん」(男は去る、ポオラ入り来る)

ポオラ「ま、エリインさんかえ」

エリイン「貴女は——貴女は私に此處に居るのを見て吃驚なすつたでせう」

ポオラ「何故此處に居らしたの、彼女と一緒になどいらつしやらないの」

エリイン「妾歸つてまゐりましたの、若し貴女が寄せて下さるなら。妾達は今朝巴里を立ちましたの、コオテリオン夫人が連れて歸つて下さいました、あの方は遂今し方まで在らしたのです、お父様はあの方をウオレンまで送つていら

つしやいました、お父様は妾にさう言つて呉れと仰しやつたのですわ」

ポオラ「今、家には貴女に逢はせ度くないお客様が泊てるのよ、お前さんも二三時間歸つて来ちやいけなかつたんだけれど」

エリイン「二三時間ですつて」

ポオラ「貴女は何時倫敦へいらつしやるの」

エリイン「妾、結局は倫敦へ行かなくなりますでせうよ」

ポオラ「熱心に」貴女——貴女あの女と喧嘩でもしたの」

エリイン「いゝえ、さうぢやないんです、だけどポオラさん(全く變つた聲にて)ポオラさん」

ポオラ「驚ろき」えゝ？(エリインは落着きてポオラの側に行き彼の女に接吻す)まあ、エリインさん！」

エリイン「妾にも接吻して頂戴」

ボオラ『まあ、貴女何うおしなの』

エリイン『妾、これからは前と違うやうにしやうと思ふの、もういけないでせうか』

ボオラ『もういけないかつて！（熱烈にエリインを接吻し且つ泣きながら）いゝえそんなことはないわ！』

エリイン『ボオラさん泣かないで下さい』

ボオラ（眼を拭ひながら）妾、すこし弱つて居るんですよ、夜も睡れないのよ、もう大丈夫——放して頂戴』

エリイン『貴女にお話ししたい事があるんですよ』

ボオラ『まあ、さう！』（ボオラはエリインの手を取りて共に土耳其椅子の上（坐る）に

エリイン『ボオラさん、巴里の妾共の住居の上にブラートン夫人と云ふ方が在

つしやいましたの、其方は妾の亡くなつた母の友達でしたの、コオテリオン夫人と妾は其方と随分度々お話ししました』

ボオラ（氣を廻して）『まあ！（エリインの手を放し）其方がコオテリオンさんの代りにお前さんの世話をなさるの』

エリイン『いゝえ、其方の弟さんが其方と一緒に入つて、其弟さんが——』（ときまぎして言葉を切る）

ボオラ『それで？』

エリイン（殆ど聞えざるが如く）『ボオラさん——』（エリインは立ち上り彼方へ歩むボオラは其後に付いて行く）

ボオラ『エリインさん！（エリインを捉へて）貴女其方に惚れたのぢやなくつて！』

（エリインは訴ふるが如くボオラを見る）

ボオラ『まあ、貴女が惚れるなんて、貴女が——、それでお前さん家へ歸つて来たのだけ、無論それなら妾と仲よしになれるだらう、多分お前さんはもう直きに妾達と別れて了ふんだらうから、それで暫くの間妾に優しくして呉れても大したことはないと言ふ腹なのれ』

エリイン『まあ、あんまりだわ』

ボオラ『お前さんは妾達誰れもかれもを欺まして居たのよ、妾達はお前さんを情の冷たい聖者さんと思ひ込んで居たのよ、ほんとに馬鹿だわね、聖者のエリインさん』

エリイン『まあ、妾恚んなことを言つて貴女に笑はれる丈だったのれ』

ボオラ『言葉の調子を變へて』『ええ』

エリイン『妾は、貴女にお話は出来ませんわ（長椅子の上に坐り）貴女は笑つたり嘲つたりすることの外には何もなさらないんだもの』

ボオラ『エリインさん、エリインさん、妾そんな積ちやなかつたのよ、妾、それは本統に妬るのよ（跪つきてエリインを抱き）妾の舌は知らぬ間に走つて了ふのよ、——妾、そんなことは變もしませうし、仕ないと誓ひもしませう。妾、種々の良い決心もしましたのよ、妾、その事は、神かけて誓ひまするわ、假令ば貴女が、誰れかを戀いて、結婚なさるにしても、妾達兩個が、互に親しく仕て行けないと云ふことはないでせう、ねえ、エリインさん、貴女、お自分から妾を接吻して下さつたのでせう、それはもう取消さないで下さいまし。もう兩個は仲良しになつたんですもの、さ、エリインさん、妾、昔な聽き度いんですから、話して下さいまし、ねえ、エリインさん』

エリイン『ヒユウさんは、先刻變なことをなすつたから妾怒つたんですけれど……、明日お父さんに逢ひに、今日巴里から来て、小母さんの所に在つしやるの、……で、お話して置なければなりませんか……』

ポオラ「さうく、何に！」

エリイン「彼の方は小母さんとの原から、此處の畑を通つて此處へ入らしたの、彼の方は、さようならを言ふ爲に彼處で待つて在らしやるのよ（庭の方を見て）彼處に在らつしやるわ……」

ポオラ「まあ」

エリイン「どうしませう」

ポオラ「妾が逢ふから連れて在らつしやい、連れて入らつしやる？」

エリイン「いゝえ、いけません」

ポオラ「けれども、妾、其方にお逢ひしたくつてならないんだもの、ね、連れて入らつしやいよ、妾オウブレイさんが逢ふ前に逢つて置くわ（氣の立つたやうに兩手で髪を撫で付け乍ら）まあ嬉しいこと（エリインは窓に沿うて出て行く）鏡——鏡、どんなにか恐さうに見えるかも知れないわ（テーブルの

上に鏡を見付けざりしポオラは長椅子の上に飛び上りてマンテルピースの上の鏡に姿を映して静に坐りて待つ）エリインがまあ、ほんとうに、あのエリインが！（暫しの間の後エリインはヒユウと共に窓に沿ふて入り来る）

エリイン「ポオラさん、此方がアーデル大尉さんですよ——此が母ですよ（ポオラは立上りて振り向く、ヒユウと彼女は暫く互にボンヤリと顔を見つめながら立つ、それよりポオラ進みよりて男に手を差し伸べる）

ポオラ（變りたる聲にてしかし、落着きて）「いかゞで御座いますか」

ヒユウ「如何で在つしやいますか」

ポオラ（エリインに）「妾はアーデルさんと倫敦でお逢ひ申したことがあるんですよ、エリインさん、今はアーデル大尉さんですよ」

ヒユウ「えゝ」

エリイン「倫敦でお逢ひでしたの？」

ポオラ『世間と言ふものは狭いものだと思しませうけれどほんとうにね』
ヒユウ『さうですな』

ポオラ『エリンさんや、妾はアーデルさんと二人限りで一寸とお話したいことがあるんだがね（ポオラはエリンの手を取りて戸口の方に伴って行き）暫く立つたら歸つて入らつしやい（エリンは微笑みてうなづき出て行く）
ポオラは、開きたる戸口よりエリンの後を見守りて立つ）暫くしてからですよ、暫くしてからですよ——（戸を閉ぢてヒユウと向ひ合ひたる椅子に坐を取り）早くなさい、主人はコオテリオン夫人とウォレンに行つて居るんですから、何うしませう』

ヒユウ（茫然として）『何うしたらいと云つて？』

ポオラ『何うするのです、何うかしなきやなりませんわ』

ヒユウ『僕はタンカレイ君があゝの女と結婚したと思つて居たのに』

ポオラ『シヤマン夫人と結婚したと云ふんでせう』

ヒユウ『え、さうです』

ポオラ『妾はその名で通つて居たんです、私達が別れた後で貴方は私のして居たことを氣を付けては居なかつたでせう』

ヒユウ『いゝえ』

ポオラ（皮肉に）『いゝえですつて』

ヒユウ『僕は印度へ行つてました』

ポオラ『何うしたらいゝんでせう』

ヒユウ『恁んな所で逢ふなんて！』

ポオラ『ほんとうにねえ？』

ヒユウ『貴女の御主人は知つちや居ないだらうね』

ポオラ『貴方と妾と丈よ』

ヒユウ『さうですか』

ポオラ『いえ、外のは主人も知つて居りますけれど』

ヒユウ『僕のは知らないんだね、僕等は一體どれ位一緒に——？』

ポオラ『はつきりと覚えては居ませんわ』

ヒユウ『貴女はこれではげつが悪いと思つて居るのね』

ポオラ『あの人の——あの人の娘ですもの（男は恨むが如き叫び聲を出して離れ兩の手にて頭を抱く）何うしたらいゝんでせう』

ヒユウ『僕は考へることも出来やしない』

ポオラ『困つたわねえ、ほんとうに妾達の住んで居た、イスルパート街の住居

はどんなになつたでせう』

ヒユウ『僕は貸して了つた』

ポオラ『あの奇麗な道具は皆何うなつたでせう』

ヒユウ『賣つて了つた』

ポオラ『妾は古い紙入れの中へ入れて置いた机の鍵を先日ふと見つけたのです

わ（突然自分の恐ろしき絶望的の境遇を自覺しヒステリーの叫び聲を發し

て跳び上る）妾は何んて馬鹿な寢言を言つてるんだらう』

ヒユウ『後生だから靜にしてお呉れよ、僕に考へさしてお呉れ』

ポオラ『妾もう氣狂ひになつて了ふわ、（突然振り向ひて男の上に乗しかかるや

うにし）、此の薄情男奴、恚んなにしてまた妾の生涯を滅茶々にしやうと思

うて』

ヒユウ『僕はいつも貴女にはよくしたぢやないか』

ポオラ（弱々しく）『御免なさい、妾それはよく分つて居るのよ、——妾は——』

（女はヒステリーの泣き乍ら長椅子の上に沈む）

ヒユウ『シツ！』

ボオラ 『あの子は今夜妾に接吻して呉れたのだけ、妾はあの子の愛情を得る爲にどんなに骨を折つたかしれやしない、それにあの子が、漸く妾を愛しかけて来た時に、あの子を憊んなにするなんて！』

ヒユウ 『静かにおしよ、そんなに弱つてはいけない』

ボオラ (咽びながら) 『貴方は御存じないんですわ、妾は此家へ来てからあまりうまくは遣つて来ませんでした、でも、それは、皆妾が悪いからなんです、私の以前の生活が私を滅茶々々にしてしまったの、けれども私は今夜と云ふ今夜から新しい生涯を始めやうと決心して居たのですわ』

ヒユウ 『ボオラさん——』

ボオラ 『妾をボオラなどと呼ばないで下さいまし』

ヒユウ 『タンカレイの奥さん、何も失望なさるやうなことはないぢやありませんか、僕は斷言します、屹度甘くいきます、屹度甘くやつて見せませう』

ボオラ (慄へながら) 『何うしたらいゝんでせうか』

ヒユウ 『黙つて在つしやい、唯黙つて在つしやい』

ボオラ 『えゝ？』 (茫然と男を見つめる)

ヒユウ 『私達が一緒に居たことを知つて来る者が出て来るなんてことは、百に一つもありやしませんよ、よしんばあるにしても、誰も私達の秘密を暴くやうなそんな馬鹿なことをする者はありません、若し誰かそんなことをする者があつたら、私達二人は打ち消せばいゝのです、憊んな大騒ぎをすることはないので、唯黙つてさへ居ればいゝのです』

ボオラ 『貴方も妾と同じやうに少ゝ氣がどうかしてゐるわね』

ヒユウ 『ぢや貴女は外にいゝ考へでもあるのかね』

ボオラ 『唯妾達の取る方法と云つては一つほかありませんわ——お互に眞面目にならうぢやありませんか、——妾、主人に何うしても話なければなりません』

んわ」

ヒユウ「貴女の御主人に！　ぢや、僕はエリインを思ひ切るんすれ、エリインを思ひ切るんすれす！」

ポオラ「え、貴方は彼娘を思ひ切らなくちやなりません」

ヒユウ「私は何うしても思ひ切ることは出来ない」

ポオラ「妾は貴方が印度でなすつた勇ましい働きを新聞で讀んだのです、それに貴方はそんなに卑怯なのですか」

ヒユウ「それは全く別の方面の勇氣だから、此勇氣が僕にはありませんよ」

ポオラ「いゝえ、妾は貴方から主人に話して下さいと言ひません、それは妾がしませう」

ヒユウ（女に蔽ひかぶさるやうにして）「貴女は、——そりや貴女よくないよ！　貴女は——！」

ポオラ（立ち上がり）「妾を脅かすなんか止して下さい、妾は何うしても言ふつもりだから」

ヒユウ（女を捉へる女は氣理に振り放して）「ねえ、ポオラ、僕は貴女を酷く扱つたことはないぢやないか、貴方もそれは知つて居る筈ぢや、それに何うしてこんな復讐をしやうと言ふのだい、僕がどんなにエリインを思つてるか貴女は知らないんだらう」

ポオラ「いゝえ、それなら、妾よく知つて居りますわ」

ヒユウ「いや知つて居るものかれ、あの娘は僕のお母さんも同じことなんだ、僕は何もかも隠さずに正直にあの娘に言つて了つた、僕が巴里で一時は道樂をしたと云ふことも話して了つた、すると一日酷くふさいで居たが、後であの娘は僕が印度でやつた勇ましい行爲に免じて僕を許してやらうと言つて呉れた、僕にとつてはあの娘は天使のやうに優しくして呉れるのだ、僕が外の

者と同じやうなことをしたからと言つてあの娘を手離すことが出来るものか、
いゝや僕は僕の知つて居る澤山の奴等の半分も道楽をしやしない、ポオラさ
ん、僕はお前に何も悪いことをしやしないぢやないか、僕にも公平にしてお
呉れよ、どうか公平にしてお呉れよ』

ポオラ『いゝえ、妾は貴方のことなんかちつとも考へて居やしないのよ、もう
此處に愚圖々々して在らつしやらない方がいゝでせう、主人はもう直ちに歸
つて來ますから』

ヒユウ（帽子を取り上げ）『ぢや兩人の話はどんなにして置かうかれ、どんな風
に定めたら良いだらうかれ』

ポオラ『貴方はどんなになさるか知りませんが、妾は主人に話さなければ
なりませんわ』

ヒユウ『馬鹿な、そんな事をさゝれるものかれ』

（烈しい險幕で女に近寄り）

ポオラ『意氣地なしの卑怯者の辭に！』

ヒユウ『やるならやつて御覽、（窓の方に行き）いゝかえ、やるならやつて見る
かいゝ』

ポオラ（男の後に付いて行き）『ぢや話したら貴方はどうなさるつもり』

ヒユウ（暫しの間の後、打ち濡りて）『どうもしやしない、僕は自殺するだらう
——それはまあ、どうでもいいゝ、さようなら』

ポオラ『さやうなら』（男は見えなくなる、女はよるめきながら土耳古椅子の處
まで行きて坐す、其時に女は小さき銀の鏡に手を觸れ、それを取り上げて自分
の姿を見つめる）

第四幕

「一」

オウブレイは、ウオレンへコオテリオン夫人を送つて歸つて來た、部屋に入ると、其處にはポオラが茫然として居る。

オウブレイは、エリインから、アーデイル大尉の話を聞いたかと質く。

元來アーデイル大尉は、印度に於て勇敢な行爲をした人で、その事は、二三ヶ月前の新聞にも出て居たのだから、あれ位の男なら、満足してエリインを嫁なくちやならんが、それにしてもお前は何う思ふかとポオラに尋く。

ポオラ「え、それに就いて妾は申しませう、申さなければなりません、先づ始

めに妾はアーデイルさんにお逢ひ申したと云ふことをお話ししなげやなりません」

オウブレイ「アーデイル大尉にかね？」

ポオラ「え、アーデイル大尉さんに」

オウブレイ「逢つたのかね」

ポオラ「貴方が他所へ行つて在らつしやる間にあの方はエリインと一語話をしやうと思つて畑から此方へ在らしやいました、妾はエリインに彼の方を連れ込まして妾に逢はせるやうにしたのです」

オウブレイ（顔を擧めて）「アーデイル大尉さんは此處の家に門番部屋と支關のあるのを知らないんだらうかね、まあ、そりやいゝ、お前はあの方に逢つてどう思つたね」

ポオラ「貴方は妾が貴方の所へ手紙を持つて來たことを覚えて入らつしやいま